
サバク脳、沙漠脳、裁く脳

柊鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバク脳、沙漠脳、裁く脳

【Nコード】

N6722F

【作者名】

柊鏡

【あらすじ】

狭い世界は終わってしまった。沙漠脳と私によって。

エクソドス

エクソドス

私は世界に水をあげる。大きく育ってくれることを切に願いつつ、水を与えながら、私は囁く。「おはよう、世界」

世界は決して答えない。

世界は言葉を識^しつてはいても、告げる手段を持っていない。世界は物質的には無表情で、無感情だ。

だから、私は一人で頷く。「よかったね、世界」

世界は今日も元気だ。

明日を目指して、その心を蠢かしている。世界は微笑みかけるすべを知らないけれど、私は世界がどんな顔をしているのか、知っている。

なぜなら、世界は私と二人きりだから。

たった二人の生き残り。たった二人の生存者。

世界がもしも一個の人間であつたなら、さながらエデンの園のアダムとエワだつたかもしれないと青臭く少女臭のきつい考えが、私の脳裏を掠めて過ぎる。

果たして、世界は男の子なのだろうか？ という根源的な問題があるにせよ。もつとも、とても些末でどうでもいい問題点だ。

私は世界と一番長く付き合つて来た。ゆえに、世界の深奥まで知っている。だから、解る。世界の感じる向き、感じる想いを私はいやというほど知っている。

私は狭くまだまだ幼い世界に、水をあげる。

如雨露に満杯まで詰まつた清浄な水も饅えた臭気を放つ毒水も、全部ひつくるめて、世界に注ぐ。

玉石混交なのではなく、必要だから。時に、偽悪や必要悪が求められるように。

大昔、生命にとって酸素は毒物で劇物だった。

古代の生命は、ミトコンドリアを取り込んで件の毒は、いまや大方の生命に必要なものになった。

毒を避けてはならない。毒を毒としてディナイアルした結果は、抗菌された気味の悪いカクトピアの端緒になるだけだ。私は失敗して、理解した。

悪きも善きも世界には必要なのだ。選り好みしてはいけない。また過ちを繰り返し、間違った方向へ進んでしまうことを私は恐れている。

どこかで、まだ世界を畏怖している。

世界を壊した世界を畏れている。世界がもう一度、カタストロフの引き金を引かない保障は何処にもありはしないのだ。

如雨露を握る私の手が震える。

恐怖からなのか、水を世界に与えること　その役目を負った自分への陶酔なのか、判然としない。小さな震えはやまないけれど、私は目は逸らさない。私は可視の世界を両のまなこでちゃんと見続ける。

世界は私の映し鏡。

私が造ってしまった間違った方向性、最後の決断は世界が決めたにしても、そうさせたのは私。

世界は半分、私。そして、私は半分、世界。私たちは、もう、切り離せない関係にある。

世界が死んだら私は死んだも同然で、私が死んだら世界は死ぬ。共依存は止まらない。もっとも、止める気は露ほどもなく。絆され合いは続く。

沙漠のような世界は、貪欲に水を吸う。

浸透度合いの高い砂はあつと言う間に乾ききる。

あげても、あげてもきりがなく、それでも私は水を与えるのをやめない。

何年もしてきたように、これからも明日も明後日も、ずっとこの

先、私が老いてしまってもこの身朽ちてしまうまで、私は中座しない。途中で終わらせない。

何度も水を汲み直し、私の脚が草臥れても、私は世界と家の狭間を往復する。体力のない私は脂汗を流す。額の球の如き汗を幾たびも拭う。

この星は暑い。

空調の壊れた家はずっと暑い。弱音はもう、吐かないと誓った。決めたから、何往復でもしてやるんだ。

私が水を注ぎ続けたなら世界はいずれ、この星全域に拡がることだろう。

世界から拡がった緑が、この灌木も茂らない星を染めあげるのだ。緑の星に変えるのだ。情報で溢れた世界が現出するのだ。

そして、世界はこの星になる。この星と世界は等価になるのだ。それは、私もそこに溶け込んでしまうこと。

世界はきつと楽園になる。狂気を排出してしまわない世界になる。無邪気さも消して、私たち二人が担う。

私はこの新世界を、喪失してしまったかつての私たちの世界に似せたくはない。

だから、私は私の水を世界にあげる。ただし、ディナリアルは忌避して、私の全身全霊を注ぐ。

これは、世界が望んだこと。世界は世界の意思で決めたこと。そして、私の行いは、私が私の意思で決めたこと。移ろう世界は

終わったのだ。

移ろう世界は終って、その古い世界の面影は家になった。

古い世界の面影は、拉がれた巨大な家。砂粒にまみれて、墓石のように聳える高い家。

私の何十倍、何百倍、何千倍もの長く太く、傾いた大家。私だけが棲んでいる古い場所。

昔はもつとたくさん棲んでいた。過去形だ。だって、皆、死んでしまった。

そう、死んでしまった。いや、世界が殺した。私が殺した。一緒になって、打ち壊したようなものだ。

壊れた家の古い住人たちは、真空中に散った。防衛用のレーザー砲門で蒸発してしまった。

かつての世界の住人たちは、全てが全て白骨すら残らず、宇宙の塵になってしまったろうか？ 消し炭になってしまっただろうか？ もしかしたら、見上げる空の大気の外に、星の重力に引かれてデブリになって彷徨っているかもしれない。

瞬く星間にたゆたっているかもしれない。

なら、私と世界を見て欲しい。少なくとも、罪滅ぼしにと私は思う。

さすれば、犬死ではなく、あなたたちは礎なのだと、嘯く機会を私は得られるはずだ。

ディナリアルは許されずとも、弁護する機会を私は求める。

私はもう、自己否定するほどにやつれてはいないのだ。自己弁護したくなるほどの矜持は許されてもいいと思う。

宇宙に消えた魂たちから、私はきつと恨まれている。万人から、きつと。赦してとは言わない。未必の故意でも。私は自分を韜晦しない。たった一人の例外を除いて。

シャルル。私は、あなたを赦さない。

もしも、あなたが私を恨むなら、恨めばいい。

あなたに恨まれたなら、私は本望だ。だって、あなたは私を殺そうとした。あなたは私の好意を裏切った。あなたは自分の世界しか見ていなかった。私は、あなたのことを世界に教えたのに。だから、あなたは殺されたんだ。世界に。

私たちは荒涼とした大地で生きて行く。

陽は昇り、沈み、二つの月が彩る夜も、肌寒くなったら、私は家に帰る。世界を寒空の下に残して、家路につく。

今日も世界にたくさん、水をあげた。私は満足だ。

「また、明日」そう、世界に告げて歩き出す。

明日も私は世界に水をあげるだろう。その為に、私は水を汲む。
人の生んだ万年の英知の源泉は、きつと大海よりも広く、その全
てを私は世界に与えられるだろうか？ 貪欲な世界はきつと全てを
識りたいと願う。私も教えたい。

世界が死ぬ前に、私が死ぬ前に、この星で新世界を拓く為、私は
今日も井戸を掘る。泥べっちゃになりながら。

一章

一章

目の前に拡がっているのは沙漠。

頭上にはひりつく太陽、吹き抜けるは膚を襲う熱風。

私の頭はここは暑いと告げる。けれど、汗は出ない。出るはずがない。ここには、沙漠なんてないのだ。見えてはいても、ない。

沙漠に見える景色はあっても、砂漠はないのだ。

物理的に存在しないのだ。投影されたデータに過ぎない。光が生み出すミラージュで、存在が光を浴びて存在証明しているわけじゃない。

私の脳が錯覚して、暑がっている、眩しがっている。それだけの話だ。

視神経から入る情報が生む誤謬だ。もともと、私は本物の砂漠を見たことはないから、思い込みに更に思い込みが乗算されているわけだ。

私は砂丘を登る。一段高い砂丘の天辺に躍り出ると、沙漠の全容が見えてくる。

遙か遠くまで、茶色の砂地は続いているように見える。本当は、ほんの数メートルもこの空間は拡がってはいないのだけれど。

砂丘から見下ろす窪んだ場所に、ピンク色の物体が小さな金属台の上にちよこんと鎮座している。沙漠脳だ。

ぼつねんと、佇んでいるの様子は結構シユールな光景だと思う。

私は丘の緩い勾配　これは丘状の物質があつてそこに映像が投射されている　を駆け下りて、沙漠脳の傍らに取り付く。

人間の脳とほぼ同じサイズの沙漠脳は超然と据えられ、無味乾燥な沙漠の只中にあつて私を迎える。

「おはよう、沙漠脳」

いつものように、私は沙漠脳に優しく語りかける。

私の声がきちんと聞こえているかは、解らない。沙漠脳は文字通り、脳味噌だけの存在で身体性を失っている。耳はない。目も口も聴覚の代替としてのセンシング装置は備わってはいるのだけれど、沙漠脳との信号回路がきちんとした連絡を持っているという保障もなく、システムと数値情報を超えたクオリアの有無は、当の沙漠脳しか知り得ない。

私が把握できるのは、外部から確認できる部分である沙漠脳の表層意識と、パーセプトロン転写されたニューロン情報だけだ。

沙漠脳は半球状の透明なケースに収納されていて、ケースの下部からは色取り取りのケーブルが延びて、砂の中に消えている。

全てのケーブルは研究室のメインフレームに接続されていて、この沙漠 実験室外へと繋がっている。

沙漠脳は体を持たないから、エネルギーの補給を外部から受けなくてはならない。その為のケーブルだ。中には生理食塩や栄養剤が詰まっていて、今も流れている。

そして、私の周囲に広がる沙漠は、沙漠脳の現在のステイタスを示したものだ。沙漠脳の心象風景としてもいい。少しニュアンスは違うが、似たようなもの。

沙漠脳から、メインフレームにフィードバックされた思考情景が、実験室の内壁に設置された有機映紙^{ハイペーパー}および、実験室内部の空中に散布されたナノマシンの機能によってヴァーチャル映像に転換されて、実験室内に映し出されて格好だ。

ヴァーチャル映像からの類推では、現在の沙漠脳はほとんど情報を持っていないと思われる。

人間の一歳児程度の情報も持っていないかもしれないと私以外の研究員は語る。

仮に持っていたにせよ、それを知る手段を私たちは持っていない。だから、沙漠脳は沙漠のような内容しか持っていない脳味噌ということで、沙漠脳とあだ名を与えられた。本来の正式な名称は長々

しく、私も覚えてはいない。

どうして不明なのかというと、沙漠脳は幾らこちら側から積極的なインプットを行っても、大したアウトプットを返さないのだ。かれこれ、研究プロジェクトが始まってから三ヶ月経っているにも関わらずに。

本実験は、研究プロジェクトとはいえっても、名称に誤解を生む。

実際は試験運用に近い為に、長いスパンで取り組むわけにもいかない。期限と期日がある。

「エイダ。反応は？」

天空からノイズ混じりの声が振って来る。天井に設置されたスピーカーからのものだ。

実験室外とのやり取りは基本的に、実験室の内壁に設置されたスピーカーとマイクで行われることになっている。

声の主は、私の上司にあたる人物だ。いや、正確さを規すなら、私は彼の子飼いのようなものかもしれない。私はそうは思いたくないのだけれど。

「ちょっと、待ってください」

私は薄汚れた白衣から親指大のスティックを取り出して、沙漠脳の収まったケースの下部に開いた開口部にインサートする。開口部からジャックが飛び出し、私の手からスティックを奪い、取り込む。すると、下部からキーボードと音声指導用のマイク、ディスプレイが飛び出す。

マイクは丁度私の胸の辺りに、ディスプレイは沙漠脳のケースの横っちょ左右に一個づつ。

スティックは所謂、カードキーに相当する。スティックを持っているのは私だけで、必然的に沙漠脳の教師役や観察役は私だけのお役目と言える。

このプロジェクトの責任者ではないけれど、ほとんど私が一手に請け負っているも同然だ。

ペーパーの新米たる私だが、このような状況にあるのには理由が

ある。あまり、言いたくない理由が。

私はキーを叩いた。

「おはよう、沙漠脳」

今度は音声ではなく、電子情報として語りかける。

ディスプレイにレスポンスはない。きちんと、データは沙漠脳へ届いたと、ケースに付帯したデバイスは主張しているのだが。もっとも、いつもの話なので残念でも何でなく。

私は頭上に向かって「反応ありません」と告げた。

沙漠脳は基本的な自然言語処理の適正は持っている、第三ラボからは知らされている。

高度に抽象化された概念は理解できないだろうが、自分の名前や挨拶程度は理解可能なはずであり、そうなると、反応がないのはラボのお墨付きが間違っているか、沙漠脳自身が拒否しているかの二択である。

欠陥品であった場合、第三ラボに乗り込んで文句の一つも言わなくちゃいけない。しかし、私はこの三ヶ月で多少なりとも沙漠脳に対して露ほどの愛着が湧いている。

できれば、瑕疵のないことを望む。いずれ、沙漠脳が舟の制御機構に組み込まれるにせよ。

酪農家が牛に愛情を持ってしまう心理に似ているかもしれない。

ドナドナは売られていく奴隷の暗喩だけれど、そんな気分だ。

「つつたく」

降り注ぐ声は何処か不機嫌だ。

それもそのはず、三ヶ月間成果があがっていないのだから。

きっと司令部からの実験結果の催促があるのだろう。研究者と一口に言っても、上層部になれば司令部などの政治屋と折衝する必要性が生じてしまう。

司令部は、民間組織のミリティアから古いシステムの刷新を要求されてしまい、上手い躲しができず、新しい制御機構の設置に躍起なのである。

「ごめんなさい。シャルル」

私は謝った。謝罪以外に私には何もできない。

「その名前で呼ぶなと言っただろうが」

怒鳴られた。私の背筋がぴんと張る。

何度どやされたか解らないが、何度やられても私は慣れない。

どうしても、父のことを思い出し、想起したくもないのに脳裏に父の翳がちらつく。口から唾をこれでもかと溢れさせながら、当り散らす醜い男の面影が。

おぞましい過去がずんずん鎌首を擡げそうになり、私は慌てて被りを振った。肩甲骨まで伸びた髪がざんばらに散る。長い前髪が視界を遮る。沙漠の景色に縞が奔った。

「ごめんなさい。チャールズ」条件反射のように、私の口は早く捲くした。

「解ればいいんだ。くそが」

あからさまな舌打ちが臆面もなく、私に降る。スピーカーから出た音が再度マイクに入力され、まるで残響めいて舌打ちは何度も降った。途端、悲しくなる。

役立たずで不甲斐ない自分と、罵倒される自分と、優しくない彼に。

前はもっと、優しい人だったのにとすると、余計に辛い。下唇が痛くなる。無意識に噛んでいた。

唇に指先を這わせると、わずかに赤みが付着した。舌で下唇を舐めると、唾液つばが染みて、ひりつとする。

私は前髪をかきあげた。早くしないと、また怒られてしまうことを畏れて。

ディスプレイを覗き込む。

「あ」助かった。そう、思った。口をついたのは、安堵と驚きがない交ぜになった感情流。

「どうした？」

ディスプレイに反応があったのだ。

三日ぶりのレスポンスだ。嬉しくなった。これで、シャルルにぶつくさ言われなくて済むと思うと、一気に心が晴れた。沙漠が一瞬、お花畑に見えてしまうほどに。

「反応ありました」自分でもびっくりするくらいの嬉々とした声が口腔から出て行く。

私の声に反するようにシャルルは冷静な調子で答えた。「何と言っている？」

「非言語反応です。感情色は赤です」

ディスプレイ上に並ぶパラメーター表示のエモーション欄にREDのサイン。他のパラメーターはNONのまま。

沙漠脳が言語反応を返さないのは問題だけれど、何も無いよりはずっとマシだ。なしのつぶてほど悲しいこともないから。

「赤あ？ 詳細は？ 不満か憎悪か、苦しみか？」

私は再び、キーを叩く。気分が乗った所為か、タイピングスピードが二割り増し。

詳細情報を紐解く為に、付帯デバイスの記憶野からソフトウェアを呼び出す。

沙漠脳内部のニューロン反応に、電子情報走査をかける。

すぐさま、半球状のカバーが明滅し、磁気共鳴によるスキヤニングと陽電子放出による脳の断層撮影が始まって、画面にプログレッシヴバーが表示された。

研究用にインターフェースを簡素化されたコンピュータのディスプレイは基本的に三色表示で、黒地に緑の文字が躍り、重要情報のみ赤で表示される。

緑のみで構成されたプログレッシヴバーは何処か、切なさを漂わせる。無味乾燥としているのだ。この、沙漠のように。

バーの進みは遅い。念の為に脳内の全領域を走査した所為だろう。私は早く進めと心中で急ぐ。思わず、意味もないのにキーボードのエンターを連打していた。

バーは中々、進行しない。まだ、十五%。

五分は優にかかるかもしれない。それじゃ、遅い。また、怒鳴られる。私はシャルルの怒号に供えて、身を固くした。こんなことなら、全領域を走査しなければよかったと悔やんでも、後の祭りで、私は後顧を憂うしかない。

案の定、バーが三十%に達したとき、天の声が振った。

「まだか？」刺々しさがありありと解った。

「はい……」

「あ？」

私の声は拾われなかったようだった。一段、声量をあげて、もう一度「はい」と言う。

スピーカーは溜息を發した。

「もういい」

「え？」

「もういい。勝手にしろ」

突き放すような物言いに私は危機感を覚えて、天井を振り仰ぐ。

「そんな！」私は叫んだ。声は裏返って、妙に甲高い。

我ながらかなりヒステリックだと、私の中の冷静な部分が分析した。

「うるさいなあ。別におまえとの関係を清算するとか言ってるんじゃない。このプロジェクトも中止にはしない。ただ、失望したってことだ。明日から来ない。てか、今から俺は帰る。明日からは第七棟に行くわ」

「それは、どういうことですか！」

「そのままの意味だ。おまえには期待してたんだけどなあ。所詮、勉強しかできないバカだったってことか。そんなんなら、学者になんかならずに春売りにでもなりやよかったんだよ。見てくれはいいいんだからなあ。ま、帰るわ」

がさがさと身支度をする音が聞こえる。

「待って！」

残響が沙漠に満ちた。シャルルの返事がない。身支度する音も消

えない。こちらの声は聞こえているはずなのに、無視される辛さに身が拉がれる。

私は何度も天井目掛けて声を張った。全部、空しい響きにしかならず、本当にシャルルは研究室を辞してしまったようだった。完全に、スピーカーは沈黙している。

臍を噛んだ。

さっきと同じように唇を噛みそうになり、慌てて上下の歯列の間に人差し指を挟みこむ。私の意識に反した顎は私の指を強く噛んだ。痛かった。

「きみなら、やれる。そう言ってくれたのは誰だったのよ……」

膝ががくがくした。私はシャルルにも見捨てられてしまったのだろうか？ どうしたらいいのか、解らなくなった。

視界が真っ暗になりそうだ。燦々と照る嘘の太陽が恨めしく思えた。

私は腰砕けた。沙漠の砂が舞い上がった。ヴァーチャル映像の砂は私の肩口をかけて行く。映像投影限界まで砂粒は飛んで行って、消えた。

早く自室へ帰ってしまいたい気分になった。

私は立ち上がるうとした。そのとき、目の端でプログラッシヴバーが100%になっていることに気付く。

確認してから、帰ろうと思った。

ディスプレイの情報は私を幻滅させた。

『不明』

馬鹿みたいだなあと感じる。これでは、役立たずと思われるかもしれない。全領域をスキャンしても意味はなかったのだ。自ら墓穴を掘っただけ。

いつもそう。私は下手ばかり打つ。馬鹿なんだ、そう思われて、罵られても、仕方ない。事実なんだから。

「さようなら、沙漠脳」

シャルルは明日も沙漠脳の相手をするように言っただけ、私に

はもうできそうもない。今晚、辞表を書いてしまおう。

色んなことからさようならだ。また、私は孤独な世界に放り出されて、ただ毎日泣くのだ。

自分にもできることがあるんだと、とんだ思い違いをした結果がこれだ。身の程を知るべきだったんだろう。

踵を返して、実験室から出ようと映像投影限界に触れた。

映像投影限界はようするに実験室の壁にあたる。そこには、中空に浮かぶ不自然な物体　タッチパネルがあつて、開閉のボタンを叩けば、扉が現れて開く。

私は開閉スイッチを押そうとした。瞬間、砂漠が揺らいだ。

陽炎が一斉に生まれて、私を包んだ。

燦々たる砂漠の陽光が翳った。映像の情報量が一気に増大し、砂と青空だけだった景色が変わる。渦潮に巻き込まれしまったような浮遊感と眩暈がした。

「何、これ？」

予想外の事態だった。

砂漠は一瞬にして蔦生い茂るジャングルに様変わりしたのだ。

古いフィルムで見る中米の風景に似ている。音のなかった景色に、動物の鳴き声が混じり、微風に靡き、こすれ合う葉の音色が私の耳朵に届く。

鳥や猿の嘶きも聞こえてきそうだった。

「あ、そうか」

私は振り返った。砂丘だった場所は小高い土山になっていた。その先にある沙漠脳の姿は見えない。

「覚えていてくれたんだ」

プロジェクトが始まった初期、私が沙漠脳に話したことを思い出した。

マヤの世界観の話だ。

私はマヤの話が好きだ。ユーラシア文明と何処か違う神秘さではなく、現行の全ての人類文明はメソポタミアの沙漠から始まったの

に対し、全く違う環境で生まれた人類のシヴィライゼーションに興味をそえられるからだ。

マヤの世界観では世界は再生と終焉を繰り返すという。

私たちの世界は五番目の世界だという話。

本当は二千十三年に終わるはずだったけれど、未だに終わってはいない。いや、もしかすると、程度問題で世界は既に六番目なのかもしれない。

それに二千十三年という解釈はキリシタン思想にまみれた結果だから、本当の終りは死んでしまったマーヤンのプリーストしか識らない。

宇宙を見ていたマーヤンは、きっと誰よりも空を識っていたと私は思う。

沙漠の民は太陽を憎み、マーヤンは太陽を愛した。

人類は、政治的な理由だったとはいえ、遂に宇宙に飛んだ。ガガーリンが宇宙に昇って数世紀、人類は宇宙をかける旅人になった。

五番目の世界は、何によって滅ぶのだろう。いや、滅んだのだろう？ 人が宇宙に出たときが五番目の世界の終りだったのかもしれない。

一番目の世界は、ジャガーの大洋の世界で人は獣性を帯びて生きていた。最後はジャガーに食われて滅んだ。

二番目の世界は、風の太陽の世界で風に耐える足を神は人に与えた。けれど、嵐には抗えず、滅んだ。

三番目の世界は、火の雨の太陽の世界。溶岩によって世界は滅び、人は飛躍する翼を得た。

四番目の世界は、水の太陽の世界。洪水によって世界は終焉を向かえ、人は海を渡る力を神から授かった。

五番目の世界は、動く太陽の世界。

動く太陽とは、太陽を中心とした太陽系という狭い世界の視座から抜け出て、銀河という観点で太陽を見た結果ではないか？ なら、終わったのだ。多分。

「ありがとう、沙漠脳」

私は壁に設えた自動扉を開けて、実験室を出た。
何故だか、涙が出た。泣いたのは何年ぶりだろう。母さんが死んだとき以来かもしれないかった。

戸を開けると、消毒液の臭いがした。またかと思いつつも、自室に入る。

むわつとした生暖かい臭気が私を襲う。

入ってすぐの操作パネルで部屋の灯をつける。

部屋に荒らされたようなあとは一切ないが、案の定、私のベッドシーツはべとべとしていた。シーツを撫でた指先が油っこくなる。過剰な消毒液が気化せずに、染みてしまっているのだ。また、洗わなきゃいけない。面倒な話だ。

私はシーツを引っ張り、小さく丸めて、浴室にある洗濯機に向かって放った。しかし、コントロールは悪く、外れた。

シーツが床に落ち、解けて広がる。

「……はあ」

仕方なく、私はシーツを丸めなおして、洗濯層に入れようとして、また、頭を抱えた。

全く悪趣味で性懲りもないと思う。

「はあ……」まやもや、肺から出るか細い空気。
抱えているシーツを一旦床に置く。

洗濯層に手をつ込んで、中にあるものを取り出す。
むみゅつとした感触と、膚に障る毛並み。

洗濯層に入っていたのは、斑柄のハムスターだった。
何処かの実験用なのだろう、タグが括られていたらしく、小さな耳には穴が空いている。目に生氣はなく、小さな身体は潰れたせんべいのようになってしまうて、哀愁を醸す。

「また、埋めなくちゃ……」

とりあえず、ビニール袋にハムスターの死骸を入れる。

臭いはきつい。消毒液の臭気の所為で解らなかったが、洗濯層に鼻をつけるとかなり臭った。腐っているようだ。手の込んだことをするものである。

こうなつては、洗濯層を洗浄しなくてはいけない。

潔癖症の人はまるごと買い換えるのかもしれないけれど、私はそんなにお金はなく、一々そのようなことをしてはキリがないことも熟知している。今回が初めてではないのだから。

洗濯機を洗濯層洗浄モードに入れた。

きつとこの分だと、他にも何かやらかされていることだろう。

私は洗濯機のある洗面室から続く風呂場を覗いた。

危惧は当たらなかった。浴槽も洗い場も綺麗だった。血の一滴も落ちてはいない。少し、安堵した。

綺麗ではあったけれど、その代わり、洗い場には紙切れが一枚落ちていた。小さなメモ用紙で、適当に破られて端はささくれている。紙にはでかかど「僭主の娘（フリーリア・プレービコレイ）、死ね」と書いてあった。

また、嘆息した。どつと疲れた。津波のような疲労感が全身を駆け巡った。

余計な手間ばかりが増える。

彼らは何を楽しんでいるか解らない。いや、私がこんな思いをするのを趣味にしているのだろう。義務だろうか？

しかし、いつになったら止むのだろう。かれこれ、十年以上続く悪意の籠った行為。私が僭主の娘だったのは、もう過去のはずなのに、だ。

最初はこのようないやがらせに傷つきました。しかし、人間は慣れる。

何度も何度も、壊れたはと時計のように繰り返されては、何の感慨も覚えなくなってしまう。

私は、彼らの期待するような落胆はしない。落胆すると、更に疲れる。気落ちすることが徒労に思えてくるのだ。

なにせ、今日はとてつもなく気が滅入ることがあったのだから。沙漠脳は励ましてくれたのかもしれないけれども、それくらいで贖われることもない。

この部屋ともおさらばかもしれない。

最悪のケースとしては、私の居場所がなくなる。この世界から。死ぬ。ということか。いやだ。私は死にたくはない。死ぬのが恐いんじゃないくて、悪徒の所為で死ぬことが赦せない。だって、殺されることと同じだから。

私はメモ用紙をくっしゃくっしゃにして、トラッシュキャンにぶち込んだ。

放物線を描いて飛んだ紙球がかこんと金属製のゴミ箱にあたる音が、少しだけ安らぎを喚起した。

しばらく、ほとんど空っぽのトラッシュキャンを眺めていた。

相も変わらず、消毒液と死臭は私の鼻腔を打つ。嗅覚を感じる鼻の受容体がこのままではバ力になってしまいうだった。

私は部屋を出た。ハムスターを埋葬する為だ。

どの道、洗濯層の洗浄が完了しなくてはシーツを洗えないのだから、自室にいても致し方ないのだ。

ハムスターを詰めた袋に加え、掌サイズのスコップを携えて。

このスコップも、この目的の為にだけに購入した。私に菜園の趣味も、観葉植物を部屋に飾る嗜好もないから、使用は限定されているわけだ。

先週は、このスコップで蛇を埋めた。

隠すように懷にビニール袋を抱えて、隠れるようにアーチ状の天井と側壁を持つコナプトの廊下を進む。

誰にも会いたくはない。耳を澄まして、近接する音に気を配る。

足音はしない。自分の靴が作る音色だけがエコーを刻む。

私の住んでいる西の居住区画は、ほとんど住人がおらず他の居住者と鉢合わせする機会はないのだが、万が一がある。

自分の足音もできる限り殺して、普段研究室へ向かう為の細い廊

下を目指す。

今、歩んでいる大廊下は、木に例えるなら幹で、そのまま直進すれば西の居住区画に立つこのコナプトを出て、商業区に至ることができる。

ハムスターを埋める予定の場所は保養区の公園街で、保養区は商業区を突っ切った方が早い。しかし、商業区はこの時間人が多いし、それだけに億劫だ。

だから、幹から伸びる枝へ分け入って、コナプトの正門ではなく非常口から外に出るのが最良だ。

商業区の外縁を回り込んで、保養区を目指す道順。商業区の外縁は工業区なので人の行き交いは少ない。

工業区には人を運ぶベルトやカーゴが走っていないので、尚更時間を必要とするけれども、試験区や学院区へ向かう際もベルトに乗らないのだから、慣れている。

コナプトの枝道えだみちに入ると急に廊下は狭くなり、足元を照らす灯以外ない薄暗い階段を降りて行く。

三階から一階まで下って、くすみひび割れたガラス張りの非常口を開けて、街灯もない通りに出る。

車も通らず、人影もない。

暗がりの外へ向けて非常口を示すサインだけが物悲しい光源となっている。

私は身を僅かに屈めながら、逃げるように居住区画を後にした。申し訳程度に植わった街路の生垣に沿いながら。幸いなことに、誰にも会わなかった。

工業区一体に、ライトアップされた無骨な輪郭が暗がりに浮かんでいる。

その中で、丸いガスプラントの半面のみが白くばやけ、恒星の反射を受ける惑星や衛星の昼間部を思わせる。

連なるガスプラントは連星のようにいて、遠方の処理施設まで続

く。球体やキューブというのは自然発生的には生まれにくい形状で、ここが人工の園であることを嫌が心にも再確認してしまう。

私はガスプラントの下を進んだ。段々、工場がまばらになり、建設物の合間から保養区の木々の葉と幹が見えてくる。

一気に緑の成分が増え、生臭い木々の香が大気に乗って漂う。

工場区と保養区の間走る幹線道路を横切った。

綺麗に整備され、均等に頭を刈り揃えられた芝生を踏みつけ、保養区のほぼ中央に位置する人工の小山へと足を向ける。見上げても、三百メートルもない小さな山だ。

けれども、自然環境の少ないこの場所では重宝されていて、幼稚園や小学校の遠足地としてよく使われている。

保養区に幾つもある公園には、時間帯の所為か、アベックがちらほらと愛し合っているのが目に入り、居心地が悪かった。

彼らはベンチを二人で占有し、抱き合い、囁き合う。まるで、そうすることが天命だ、とでもいわんばかりで。

居心地悪さの根底にあるのは、嫉妬なのだろう。

異性への愛情や恋慕ではなく、愛なる感情そのものへの度し難い憎しみの裏返し。贋作ばかりを掴まされたプライドだけ高い古美術商の思いに似る感情流。

アベックらが往来の人であつたなら、私は彼らを回避して、またまた遠まわしをして、小山を目指しただろう。

しかし、彼らは彼ら二人の世界に耽溺していて、私の存在に気が付きはしない。

仮に私の存在を捉えているにせよ、彼らは無視を決め込む。二人の世界に私はいないのだ。背景として彼らの世界に私は混じる。なので、堂々と彼らの面前を進んでも、何の問題もない。

この場合、闖入者は私なのだから。邪魔なことに変わりなくても、当事者が真逆なのだ。この状況を嬉しむべきか、否かは、知らない。三つの公園と、四つの噴水と十七のベンチを過ぎて、常緑樹の生い茂る街灯の届きにくくなった森へと分け入った。ここまで来れば、

誰も居はしない。日中帯ならいざ知らず、今は夜間帯なのだ。

多くの人は二十四時間したいことが、ある程度できる時代になっても、本来の人類のスケジューリングを守って暮らしている。体内時計を狂わせない為に擬似太陽も、嘘の日中時間も必要なのだ。

やや、歩き疲れた膝に手を宛がいがながら、小山を登り始めた。

近い時間に水が撒かれたらしく、土は湿って柔らかく、私のブーツのかかとを執拗に食い込ませた。余計な体力を浪費した。

そうこうするうちに、木々が減って行く。

小山の天辺は平らになっていて、森林浴のできる麓とは異なり、さまざまなリクリエーション用途の為に樹木の植わる数を減らしている。

頂上の近辺に、掘り返された後を見つけた。ひと際大きな広葉樹の根元。

卒塔婆のような形の木板が、そのむき出しの土に刺さっている。

目印にと、資材置き場から失敬してきたものだ。私は、やώρα卒塔婆を抜く。

抜いた板を脇に追いやって、スコップを土肌の隣に突き刺し、掘る。十センチも穿れば十分だ。

ハムスターの詰まったビニールを小さく縮めて、穴にぎゅうぎゅうに詰めて押し込み、その上に土塊つちくれを被せ直す。掌で土の表層を押し固める。

最後に卒塔婆を差し直し、一回合掌して私は踵を返した。

近いうちに、また来ることになるだろうから、そのとき、再び宜しくと胸中に囁く。何を宜しくしているのかと一抹の自嘲を共にして。

なすべきは済んだので、小山を下ろうとした。すると、携帯端末が鳴った。

驚いた。肩が跳ね上がって、女々しい悲鳴が出た。

突如の敵襲に怯える新兵のように私は左右をきよるきよる見た。意味もないのに、バカみたいだ。これでは、シエルショックの患者

じゃないか。

普段は鳴らない電話が鳴った。それだけの話なのに。

平時、目覚ましと腕時計の代用品に感じているだけに、予想外でびつくりして、ポケットに慌てて手をつ込み、掴み損ねて取り落とす。

端末のサブディスプレイが青白く明滅している。着信を告げている。芝の上で震えている。鮮魚のようにのたうちまわり。

ちよつと怖いと思った。

自分の端末なのに、少しの恐怖を覚えつつ拾い、メインディスプレイを開いた。

火の点ったディスプレイには、連絡をして来た相手の名前　シャルルが表示されている。私は躊躇した。睨めっこするように、画面を凝視した。

かなうなら、シャルルが諦めてくれることを思った。けれど、コールは止まない。私が受信するまで鳴らす気だろうか。たぶん、その通り。彼はそういう男だ。

私は腹を決めて、受信した。

「もしもし……」

「あー、俺だ」

「シャ　、チャールズ。どうしたんですか？」

できる限り、平静を保つように努めた。口から出せない荒い息を鼻から変わりに捻り出す。

「おまえ、勝手に帰っただろう」

「……ごめんなさい」

「今日は夜間の作業と決まっていたらどう？」

司令部の個人就業帯の取り決めでそうになっていた。私はシャルルに背いたばかりでなく、司令部にもケツをまくったのだ。

「……ごめんなさい」

謝る以外の方策が私にはない。語尾が震えた。「今日も、謝ってばかりだなあ。情けないヤツめ」と、脳内の、クールなもうひとり

の私が管を巻く。

シャルルはしばらく黙っていた。その沈黙に私は怯えた。受話器からは、彼の呼吸音だけがクリアに漏れてくる。

「まあいい。これから、来れるか？」

少しバツの悪そうな彼の声。

「えっと……何処にでしょう？」

解っているのに、訊き返した。

「俺の家」

「その……」言いよんだ。心中のアイデアを確認するのが恐ろしかった。しかし、シャルルは私の想いを察したようで、口を開いた。「だから、おまえに沙漠脳の試験を止めるとは言っていないだろうがよ。今夜の、相手してくれないか？　と言ってるんだ」

恥ずかしそうに彼は言った。

ああ、そうか。私は捨てられてはいなかったのか。合点した。そして、安心した。ハムスターを埋めたことがとつくの昔のことに思えてきた。

彼はいつもそうだったじゃないか。

本当に私を突き放すことなんてないのだ。最後には、ちゃんと私を求めてくれるのだ。

私に彼が必要なように、彼にも私が必要なんだ。こんな簡単なことをどうして、忘れていたのだろう。やっぱり、私はバカな子だ。

嬉しさが満ちて、私は「すぐ行きます」とだけ告げて、電話を切った。

私は保養区から直接住宅区へ向かった。路面鉄道を使った。最早、人の目は大して億劫にならなかった。

注がれる侮蔑の視線も今の私にはダメージを与えられない。今の私には守護がかかっている。

私は晒った。愚かな人々を。

彼は、住宅区の大きな一戸建てに住んでいる。居住区に並び立つコナプトには、入居していない。なぜなら、一級のお金持ちだからだ。

私が、豪華な装飾が彩る玄関のノッカーをコツコツ鳴らすと、すぐさま彼は顔を出した。

私はすぐに迎え入れられ、夕食を食べさせられ、寝かされた。彼の相手はとても疲れた。どちらかと言えば肉体的に。それでも、しかし、満足ではあった。その時は。

後悔するのは、いつも終わってからと決まっているのだから。翌日の朝は嘔吐と下痢で始まった。

二章

二章

沙漠はなかった。鬱蒼たるジャングルがあった。

今日も、先日と同じように居もしない動植物のざわめきが聞こえる。幻聴ではなく、スピーカーから漏れている。このような機能はなかったはずであるが。

沙漠脳が外部デバイスを操作できるようになったのかもしれない。ゆくゆくは、沙漠脳は舟ふねのシステムになるのだから、よい傾向といえた。けれど、深く考えることはしない。

私は余りそのことに、かまわずに沙漠脳のもとへ行った。

姿を見るなり、いつもの挨拶。欠かさない日課。「おはよう。沙漠脳」

やはり、沙漠脳は答えない。答えないけれど、私はもう知っている。

沙漠脳はきちんと私の話を覚えていた。

それは、きちんと私の話を聞いてくれたということ。この三ヶ月に於いて、徒労なんかなかったのだ。上手くいっていた。そうだ、私は優秀だったはずなのだ。ヘマを覆ってきたじゃないか。

私はスティックを挿さずに、沙漠脳へそのままに、語りかけた。

何のことはない、おしゃべりを。

私にはこれまで、気軽に取り留めのない話をする相手がいなかった。

シャルルでさ気の置けない仲ではない。かつてはそうだったかもしれないが、その思いはあくまで、私の独り合点という名の誤認であつたことを、今は理解している。

だからだろうか、一度堰を切ると埒は簡単に瓦解して、私はあれやこれやと語り続けた。

研究室にもモニタールームにも誰もいなかった。

実験室に入る前にモニタールームを通ることになるのだが、灯は消えていたし、出勤スケジュールに私以外の名前が記載されてはいなかった。

シャルルは自分の言を守って、来ていない。本当に来ないつもりなのだろう。

昨晚もそのように寝台の中で言っていた。彼は自分で決めたことは守るタイプだから、来るはずがない。

悲しくはあれど、しかし、それは好都合でもある。好きなだけ、好きなように、私は自在に自らの口を開け閉めすることが叶うのだ。別個の生き物のように、私の唇は動いた。咽はがらがら鳴った。

私は話した。

私のことを話した。

今まで話せなかったことをたくさん。

母さんのこと。父のこと。シャルルのこと。私にまつわる物々（ぶつぶつ）を。

最初は世間話のような話題だったのに、話の方向性は私の暗い部分に流れて行く。夜深まったときの会話みたいだ。

今日も夜間勤務の所為だろうか？ いや、そもそも私に同年代の女子たちのように、どこぞのブティックが、どこぞの俳優が、どこぞの水物が、といった話題を持たないからだろうと思う。

私の心の抽斗は乱雑に散っていて、なおかつ、とても乏しいのだ。それでも、ほとんど開かずの抽斗の中の記憶たちは、たまの顔見せに歓喜しているのも事実だ。饅えた臭いのする記憶たちも、晴れて活躍の機会を得たわけである。

「そのとき、来てくれた」

私は遠い目をした。視界の悪いジャングルは青い空の映像を見せてくれなかったが、十分だった。

私の前にピンク色の聞き手がいるだけで、満足だった。

頷きもしない聞き手だけれど、聞いてくれることが全てだった。

た。

「私は初めて、必要とされたんだよ。誰かに。 沙漠脳は

私はシャルルに初めて会ったときのことを話していて、はたと沙漠脳の置かれた立場を慮った。

沙漠脳は私とは違う。最初から求められて造られた。

何となくのセックスで産まれたわけでもなく、この世に現出したハナからどこにはめ込まれる存在か、判明している。

敷設されたレールの上を進むということは、奔放な人にはしがらみに過ぎずとも、しがらみは何もレールだけではないのだから、レールはあるに越したことはない。途中下車する駅があればいい。

レールがないということは、荒野の只中にいるようなもので、その地平には雨宿りするための屋根もありはしないのだ。

沙漠脳の置かれた境遇が、羨ましいけれど、妬ましい感情は湧かないのが不思議だった。

なぜかは、解らない。

親近感 違う。

不確かなもやもやが胸中に沸き立つ。

「沙漠脳は、いいよね」

スティックを挿していないので、ディスプレイは展開されておらず、沙漠脳のレスポンスを視覚的に確認できない。勿論、本来ならば。

しかし、私はもう知っている。沙漠脳の心象風景に浮かぶ機微を知っている。

きちんと、自分の両目で確認できる。単に、今まで私たちが沙漠脳の想いに気付かなかっただけで、愚かしかったのは私たち白衣の側だったわけだ。

木を見て森を見ずとはよく言ったモノである。

私の言葉に、木々がざわめく。揺れる葉の狭間から群青色の空が顔を出す。

沙漠脳はきちんと反応している。沙漠脳を包むケースに設置されたセンシングデバイスは、きちんと繋がっている。今は、解る。

「羨ましいよ」

一方的な会話は 会話と呼んでもいいのだろうか？ 独り言かもしれない。けれども、私の言葉はやまない。

自分の本分をとくに、忘れた。

たまり溜まったダム水は、決壊したら二度と土囊みすごときじゃ防げない。濁流は、ずんずん流れて行くのみぞ。されど、流されていて泳げればいいのだ。

沙漠脳は観察対象なのだから第三者的な視座に立たなくちゃならないが、そんなことはどうでもよかった。どうでもいいのだ。忘れて至極。

父は私の記憶の中では、いつも酒びたりでどうしようもないクズだった。絵に描いたような駄目人間。

されど、駄目な人間にも二種類あって、利用価値のあるナマゴミのようなものと、リサイクルもできないもの。彼は後者だった。

人間、挫折すると酒に奔り、耽溺してしまうのは古今東西のお約束のようなものなのか、物心ついたときから、父はマトモではなかった。

父が挫折したというのは、母の弁によるものだけれど、最初からアルコール依存の人間はいないだろうから、嘘ではなかったと思う。四六時中赤ら顔で、罵詈雑言を母と私に浴びせるのが彼の日課だった。

その言葉が彼の本心から出ていたものであるのは、確かである。私は感じていたが、他方、母さんはアルコールが悪いのだ、というような蒙昧なことを言っていた。それは、発端と結果の因果関係が逆だと幼心に思ったものだ。

アルコールは少量なれば百薬の長、大量に含めば害悪。この場合、悪以外の何様でもなかった。

知的さが盲目な母さんは、アルコールが悪いと何度も何度も繰返すように言った。しかし、私はそのアイデアを否み続けた。とてもじゃないが、承服できなかった。

アルコールが外すのは心の枷だけだ。その人の人格そのものを歪めることはない。依存性を持っていても麻薬じゃない。

結局、心の澱を垂れ流す栓が緩むだけのこと。根っからの善人は飲酒したところで、醜悪になったりはしない。

ハナから醜悪な心持を身の内に宿す人が、それを韜晦する理性的なベールを失って、全開になったアクセルで踏み込んで、自らの悪しところを露見させるに過ぎない。

私は、母さんにするように反駁した。

すると、彼女はまた言い訳するのである。

「あの人はハメられたのよ」と。

父は舟の艦長だった。私が嬰兒のころまでそうだったのだと言う。私の記憶にはない。古い古い話なのだ。私の人生の長さに比べれば。私はまだ、二十二年しか生を全うしていない。

箆笥の上のアルバム立てにはまった父の写真は、艦長の制服制帽を被り、華々しい笑みを浮かべている姿ではあった。

けれど、それは虚構か幻想か悪い冗談にしか思えず、私にとっては愚劣な父親が全てだった。

そして、私は知っていた。

周囲の人間が、父を何と呼んでいるのか。父の失脚をどう捉えているのか。

隣人たちは、父をロクデナシのゴミ野郎と称し、父の失脚も自業自得だと言い、その彼の娘だというだけの些末な関係性で私を殴った。

女に手をあげるあげないの倫理を超えた感情が、拳を振るわせていることが薄々解った。

誰も止めはしなかった。

憲兵さえも、見て見知らぬふりをしていた。

その顔はいつも、できるなら暴行に参加したくてうずうずしているように見えた。職業柄、できないのだといわんばかりで。さすがに、免職しないだけの理性はあったらしい。

だから、イヤでも解ったのだ。理解できた。

父は失脚すべくして、失脚したのだ。父は最初から首尾一貫したゴミ野郎だったのだ。人は無意味に恨まれたりしない。

火のないところに煙はたたない。たとえ、小さな寝煙草が家屋を全焼させても、原因は小さな火の粉なのだから。真空中では、絶対物は燃えない。

具体的に父が何をしでかしたのかは、私は詳しくは知らないし今でも知らないが、大方の想像はついた。

十年前の舟の管理システムは、艦長の自在になる設計になっていた。

父に代替わりするまでの艦長たちは、さぞや聖人君子だったのだろう。

その手に担わされた絶対権限を悪用することはなく、舟は運用されていたはずだ。だから、システムはそのまま維持されたのだ。

しかし、父はこの性善説的設定に悪意で臨んだ、艦長の絶対権限を用いて、舟の経済、個人のプライバシー、そのほか諸々を自分の思うまま、欲望の趣くままにしたに違いない。

ゆえに、恨まれた。クーデターを起こされて、失脚した。

そのとき結成された組織であるミリティアは、いまだにそこその権力を持っている。

反権力が当該権力を転覆したあとに、そっくり権力になってしまふ革命の構図そのまま、当該権力が大きくあればあるほどに、反権力は増大してしまう。

殺されなかっただけマシだと思う。

暴君は最後には断頭台に送られるのが常なのに。

そこで思う、母さんが父を擁護していたことの背景には、父から湧き出る甘い汁を吸っていた経緯があるのだろう。

私にとって、父も母も味方ではなく、私に降りかかる火の粉を焚きつけたクソ虫に他ならなかった。

それでも、母さんが死んだとき、私は泪したのだ。

理由は簡単だ。私には味方何処にもおらず、母さんだけが少なくとも頼りだったのだから。味方にあらずとも、必要ではあった。彼女の立ち位置は中立^{ニユートラル}だったから。

平静から、私は勉強ばかりする子供だった。父の暴虐に身を硬くしつつ、机に向かっていた。

どうして、勉強に勤^{いそ}しんだかといえば、優秀な存在と知らしめることができたなら、私を必要とする誰かが私を助けてくれると思っただからだ。深い鬱々な森にやってくる白馬の 騎士を待っていたのかもしれない。

猛勉強は功を奏して、私は中等学校を出たとき、パトロンを得た。彼は私を高等学校に進学させ、私生活の援助もしてくれた。

順風満帆ではないが、並の生活に私は近づき、二年生のとき父が死に、三年生のときに母が死んだ。

父の死体は何処かへ運び去られ、母の遺体は空に流された。

高等学校の生活も、また、侘しく辛くはあったけれど、私はさっさか飛び級して大学へ進んで、二十歳のときに博士号を得た。脳科学分野で。

私は人間の認識に興味があった。

脳が閉じた世界で存在できたなら、そこはユーフォリアに思えた。^{インゲニオス}脳人間は私の理想だった。脳味噌だけの存在であれば、自由な外在世界を想定し、内在世界を再構成し、自由自在にできると考えた。

水槽の中の脳と揶揄されても、私には実現したいことだった。

私は独りで創造主であり、住人であり、世の中になりたかった。自家中毒的なクオリアとレアリアの連鎖も吝かではなかった。

だけれど、私は弱かった。

結局、私は必要とされることを望み、シャルルのなすがままに、博士課程を終えてから、第三ラボに就職した。

それでも、齒車になれたことに感謝した。
少なくとも、人間的神の領分デウス・フー・マースに至れずとも、汎人的な地平に私は立てたのだから。

「ただいま」

私はコナプトの廊下を走った所為で切れてしまった息を整えながら、玄関先から言った。

居間の方から、母さんの「おかえり」が聞こえる。

私は鞆を玄関に投げて、「お菓子」と言った。

ソファーから立ち上がった母さんは、やれやれと困り顔で私の頭をなでながら、戸棚からクッキーを出してくれた。

アルミ缶に入ったクッキーを早速、摘もつと手を伸ばす。

すると、母さんの手が缶と私の間隙に分け入った。私の手はクッキーを掴み損ねた。

「手、洗いなさい」

私は反抗の目を向けてみた。しかし、母さんは動じもしない。

しかたないので、私は手を洗った。

私の手は泥だらけだったのだ。洗面所の洗面台コンテナがすぐさま泥べっちゃになった。石鹼も茶色になってしまった。

適当に手水てあらいを済ませて、クッキーを頬張りたかったけれど、半端では母さんは納得しない。だから、念入りにつめの先に詰まった土塊まで取り除いた。

綺麗さっぱりになってから、居間に戻った。

細切れチョコの入ったクッキーはおいしかった。
こま

さくさくするクッキー本体に混じるチョコチップは常温保存の所為で、やや溶けていて、緩急のついた食感がたまらない。

二個目、三個目とパクついていると、母さんがアルミ缶に蓋をした。

私は眇目をして彼女を見上げる。抗議の眼差しをこれでもか、と注いだ。

しかし、私の言外の非難と要求は、彼女の完全無欠の微笑みによって却下された。

口の中で残った破片をもぐもぐしながら、仕方ないので諦めた。クッキーのある菓子棚は私の身長には余り、届かないのだ。盗み食いをすると、後が恐いのでできない。

「夕食、食べれないでしょう」

人差し指を立てて、母さんは言った。

「何？ メニユー」

「何でしょうね」意地の悪い笑みだ。母さんはイジワルだ。

私はお腹が空いていた。今日もたくさん遊んだ。疲れた。成長期だから、多くのカロリーが要るんだ。

「何？ 何？」

母さんは困った顔をした。私は母さんを困らせてばかりだ。けれど、それも今しかできないそんな気がしたから、続ける。

「何？ 何？ なにいい！」

「解った。解ったから」

根負けして、母さんは「シチューよ」と答えてくれた。

「手抜きだ」私は頬を膨らませた。

先週のカロリード・ライスと同じように、男の手料理のようなブツ切り野菜が煮込まれている深鍋が食卓にでんと置かれる様が、ありありと浮かんた。

「全く。シチューだってちゃんと作ると手間暇かかるんですからね」

母さんは私の頭の天辺をもう一度、なでた。今度は髪の毛をもみくつしゃにした。癖っ毛気味の頭髮はすぐにボンバーヘッドになってしまった。

ひとしきり、娘をなでくり回して充たされたのか母さんは「風呂、入りなさい」と言った。

「はい」

泥にまみれていたのは何も手だけじゃなかった。全身が汚れてい

た。

確かに、今の私は入浴すべき状態であった。

脱衣所で、乾いた泥を落としながら、脱いだ服を洗濯機に突っ込んで。

「臭い……」

異臭がした。

泥や木の汁の臭いじゃない。もっと醜悪なものだ。腐臭と呼ぶのがふさわしい感じがする。

私はきよきよと辺りを見回した。

視覚で嗅覚的な化学物質の出所が解る由などないのだが、そうしてしまふ自分がいて、何だか滑稽に思えた。

「おかえりなさい」

玄関の方で、母さんの声がした。彼女の声はどこかしら、浮き足立った色を帯びている。

父が帰ってきたらしい。

「ただいま」父の声だ。間違いない。

ただ、何かが違う。穏やかだ。両親のやり取りが、普通じゃない。変だ。和気藹々（わきあいあい）と喋っている。

普通であるべきなのに、変だ。

変の正体は何だろう？ 解らない。

解らないにも関わらず、いやな予感が脳内を駆け抜けて行く。

予感だけが予測を生んで、勝手な予見を造成して行く。解答は得られない。

私は何だか恐くなって、風呂場に飛び込んだ。

家から飛び出てしまいたかったのが本番だったけれど、玄関先で話しているオシドリ夫婦が邪魔だったので、洗い場に駆け入る以外の逃避口がなかった。

勢い余ってしまい、水で摩擦係数のさがったタイルに滑り、更に不幸にも風呂椅子を蹴って、コカした。私自身もバランスを失って、倒れた。

風呂場の壁面で後頭部を打った。 我に返った。

「今日は何もなし……と」

洗濯し直したシーツは気持ちよい状態にあった。

柑橘系の芳香剤の混じった洗剤を使った所為で、みかん臭い。みかんの臭いは嫌いじゃない。しかしながら、ちよつと分量を間違えてしまったようだ。

見渡す室内にも、誰かが侵入した様子はなく、安心した。

昨日の今日では芸もないと彼らも解っているのだろうか。

できるなら、もう飽きてもいいのじゃないか？ と思い、ベッドの縁に腰掛ける。スプリングがバ力になりかけた安手のベッドは、ぎいと唸った。潰れたマットレスは、私の体重に大した反発も返さなかった。

床に転がったりリモコンを拾った。テレビの電源を入れる。

映ったチャンネルは、司令部の官営チャンネルだった。

右上に、司令部通信の表示があるから間違いない。

左上には、緊急放送と書いてある。

「調査部の報告によると」

角ばった顎のキャスターが神妙な面持ちの中に歓喜の色を隠しながら、原稿を読んでいる。が、ほとんど、原稿に目を落とさないとそこを見ると、思いの向くままに口を継いでいるのかもしれない。

「そっか……見付かったんだ」

私は他人事のようにぼやく。ただし、半分、画面に語りかけていた。

けれど、私の意見などテレビは聞かない。一方的に情報をこっちに流してくる。だから、キャスターは興奮のままに、続ける。

「移民可能であるとの報告が」

感極まったようにキャスターは、目尻を擦った。嘘なきすらしてない、彼の両眼は乾ききっているではないか。寒い演出だと思った。背筋がゾクつとした。

「現在の速度で航行を続けた場合、約半年後に
半年。短い。」

長い旅路は終わるようだ。

人類の、宇宙の虜囚という不遇の生活も、洋々ピリオドが打たれるわけだ。

この一大二ユースを第一世代が聞いたなら、さぞや狂乱しただろう。

しかし、私は第六世代にあたる。

私の両親もそのまた両親も、そのまた両親も舟が出帆した当初のことなど歴史のテキストとフィルムでしか知らない。喜べと演出されても、困るのが本音だ。

偽書かどうかを判断するには、原典にあたる以外に方法はなく、印字されたり、写本されたものでは、その真偽は解らない。

映像編集技術が極まった二十一世紀中葉以降、フィルム媒体もかつての書物と同じ嫌疑をかけられるようになった。

フィルムが真実であると見抜くには、最初に収録された物理媒体の年代測定を調べなくちゃならない。

デジタルデータは劣化知らずだから、厄介だ。考古学的な調査、裏づけは意味があるが、舟の中ではできるはずがない。

だから、手放して他人の言を信じる人とは違って、私は歴史的資料をあまり信用しておらず、船出に際し、郷愁に染まる第一世代たちの映像を見ても、そこに感動や感化や感激、感慨を覚えることはなかった。

それでも、新天地が拓かれるのは私にとっても、悪い話じゃない。狭い世界が一気に広がる見込みが生まれたのだから。

私はテレビの電源を切ろうとして、チャンネルを変えた。音量をあげた覚えはないのに、スピーカーががなり立てた。音量を落とす。画面ではミリティアのアジテーターが叫ぶように演説をしている。ミリティアの広報チャンネルだった。

軍服のような厚手の生地でできた格好に、軍人調の角ばった喋り

方。舟には軍隊は存在せず　そもそも敵対する国家、もとい、国家という枠組みがないのだから、兵士は必要ない　数百人の憲兵がいるだけである。にも関わらず、あたかも、自分らが不在の軍人の代わりをしているといわんばかりだ。

聴衆も一様に、彼と同じような格好をしている。

一つ違うのは、アジテーターは着帽していないが、オーディエンスは帽子を被っている点だ。

「我らは新世界に踏み出す！」

歓声なのか怒号なのか、判然としない喧騒がスピーカーから生み出された。

聴衆が右手を掲げた。斜め四十五度にして、演者を仰ぐ。

その反応に勢いを得て、更に一段高まった声でマイクに咆哮し始めた。低く、恫喝せんばかりの声だ。私は好感を感じない。

「新世界にはあらたな秩序が希求される。狭く苦しい箱舟の時代は、終わった。我らはディアスポラの民ではない。遙々大海原に漕ぎ出した選民なのである。いつか、乾いた大地に種をまき、落穂を摘むことを願ってだ。」

つまり、これは使命である。しかるに、我らはこの狭小な世界を新世界に持ち出すことをよしとしない！　インド神話に於いて、主神シヴァは、破壊の神であると同時に創造神である。なぜか！」

聴衆に問いかけるように、両手を羽のように胸の前に差し出す。鷹揚な動作だが、際限なき自信が滲み出している。

アジテーターが、さっと両の掌を返す。

瞬間、ざわめく聞き手たちは、「それが秩序だ！」と異口同音に、それも計ったような正確さで唱和した。

「そうだ。それが秩序である。人は資源から原料を、原料から資材を、資材から家を造る。果たして、これは秩序か、混沌か！」

再び、さきほどと同じ動作。

「混沌だ！」唱和する聴衆。雁首を演者に向ける。

「そうだ。混沌である！　エントロピーは日々、肥大化しているの

だ。目に見える秩序は虚構なのである。なぜなら、選択肢はエントロピーの増幅によって、狭まり、普遍していた確率は偏重して行くからだ。

ゆえに、我らは現在の虚構の秩序を打破し、リセットしなければならぬ。これも、また使命である。

真の秩序とは、愚昧なやからが混沌と称する概念なのである。我らの言う秩序と、彼らが誤認している秩序は同じ言葉で語られようと、全く違うモノである。解らず屋に貸す耳は要らぬ。さあ、革命しようではないか」

スピーチの×（しめ）に演者は差し出した手を平ではなく、拳にして、高々と天空に掲げた。視線もそれに倣わせる。

ヒートアップしたオーディエンスたちが、口々に快哉を叫ぶ。

圧倒的な熱気が、画面の先に充満しているのが解った。何に熱中しているのかも解っている。しかし、遠い世界の住人のように感じた。

本当は、彼らの構成員だって私の住まうコナプトに住んでいるかもしれないだろうに。聴衆の中には、顔を合わせたことのある人もいるだろう。

商店の売り子かもしれないし、あの意地汚い清掃係かもしれない。けれども、帽子と軍服にまみれた彼らの中に、個人を特定できる何かは見当たらなかった。

私はテレビを消そうとして、またチャンネルだけ変えた。

どうも、消す気にならなかったからだ。暇なんだといえば、それまでの話なのだけれども。

どのチャンネルも、「新世界」の話題で持ちきりだ。

本来、ドキュメントをやっているはずの番組も放送予定を変えて、緊急ニュースを流している始末だ。

これでは、ロクに暇潰しできず、ぴこぴことリモコンのスイッチを押し続け、チャンネルが結局一巡してしまい、司令部の官報に戻ったところで、最終的に電源を落とした。

することを失くした私は、ベッドに四肢を投げ出して、明るいま
まじゃ眠れないからと、灯を消そうとし　　そういえば、帰宅して
から電灯を点していなかった事実に、今更気付く。

テレビの消えた室内は、ブラインドの狭間を抜けてきた外の青白
い明かりだけに照らされ、薄暗く、目を閉じれば、すぐさま睡魔が
降臨した。

意識はあつという間に、混濁した。

現れた睡魔は、私に夢を見せた。

ばやけた空から、不意に白鯨が私の頭上から降ってきて、その大
きな口から生えたヒゲで私を大海に攫^{さら}った。鯨のヒゲはイメージに
反して、硬く、ごつごつしていた。

群青色の海面を白鯨は私を咥えたまま、低空飛行して、白く照り
つける太陽に目がくらくらしした。

海は　フィルムで見たままの場所だった。確かに、ソルティー
な臭いがした。磯臭い、と呼ぶ香。

海の先の地平に砂浜が見え始める。

とても早く、空中を滑る白鯨はあつという間に浜辺に到着し、私
を投げた。

砂は私をやりわりと受け止めた。その代わり、海砂まみれになっ
た。

^{クカラチャ}御器喰のような蟲が、岩の側面を触覚をひくつかせつつ、這って
いた。^{シーローチ}

舟蟲という蟲だろう。ローチというだけあって、御器喰にそつく
りだ。

ゴロタ石の翳にたくさん、姿が見えた。わっさわっさと、動き、
足は独立した生物のようで、気色悪かった。怖気がした。

浜には、色々なものが漂着している。

何処から流れてきたのか、乾木や軽石が、半切れの入れ子ライン
を描いている。

腐った魚があった。蛆のような蟲が内臓^{はらわた}を食っている。硬骨が顔

を出している。

残存した表皮から察すると、熱帯魚のようだ。黒とイエローの縞々があるし、尖った背ビレがある。

打ち付ける波は、白い泡を生み、寄せては返す。

遠い海面に空き缶が浮かんでいた。錆に彩られ、ゆらゆら揺れる。私は、遠い場所のはずなのに、その空き缶に手を伸ばした。当然、届かないと思った。しかし、きちんと届いた。

私の手は空き缶を握り締めていた。

妙チクリンな夢だと思った。

べったべったにぬたくった金メッキのような、夢だった。寝覚めは勿論、悪かったのは言うまでもない。

世間はどこか浮き足立っている。

井戸端会議をする人も、アベック同士の会話にも、新世界の話題が混ざり込み、飽きもせず人々は繰り返す。テレビもそうだ。連日、特番を垂れ流す。

お陰で、私は早く寝るようになってしまった。無論、シャルルに呼ばれた場合と、嫌がらせを受けた場合は除くのだけれど。

だって、世間のこの好事は、私にとって全く関係のない話だ。

いや、本当は関係があることを理解してはいても、そう思わなければならぬ事情が私にはある。

私が仮に、移民先の惑星の詳細を識ってしまったなら、最近口の緩んでしまった不甲斐ない私は、何かの拍子につい漏らしてしまいかねないし、そうしてしまえば、苦しませるかもしれないのだ。彼を。

身を隠すようにしながら、研究室へ向かう日々を過ごす。

何も変わりはない。変わるのは周囲ばかりだ。勝手に激流がやってきて、雨は雨乞い知らずに降る。

いや、それは違った。私の間近の存在で、日夜変わって行くものがある。沙漠脳だ。違う。沙漠脳も、やっぱり、私の周囲のはずだ。

けれども、関係ないで割り切れそうもなかった。

沙漠脳の映し出す心象風景は、日を追うごとに煩雑になって行った。

ジャングルの蔭は増え、複雑な形状をするようになり、最近ではホログラムで描かれた動物までもが飛び出すようになってきた。

実験室の開閉扉を開けて、いきなり猿が奇声をえながら、飛び込んできたときは焦った。

頬に作らされた青タンに当たったガーゼが、私の飛びすさった反動で剥がれたほどだ。

もつとも、擬似的なものであるので、物理的なバックボーンを持たない映像の猿は私の身体を難なく透過して、扉の框 映像限界点を踏み越えてしまい、消えた。

映像の猿は、外の廊下まで踏み出すことはできないのだ。

沙漠脳の世界は、充実していても、やっぱり狭小である。

「おはよう、沙漠脳」

先週からスケジュール変更が行われ、昼間勤務になったが、もともと夜間でもおはようとあいさつしてきたから、今日もおはようだ。特定の業界筋ではおはようが常時のあいさつであるそうだ。

あいかわらず、沙漠脳は答えてはくれないが、何もリングステイクなものが全てではないし、いいのだ。この場合。

近日は、あらかた沙漠脳に話せるだけの抽斗の中身を開陳してしまい、愚痴みたいなことが増えている。

考えずに言をほいほいと垂れ流すのは、気分のいいことではないが、垂れ流している最中は何処か安心する。

沙漠脳を体のいい語りかけ人形ぬいぐるみと思っているわけじゃない。ただ、私には彼しかないのだ。

私は訊いた。「ねえ、都合のいい女ってどんな人だと思う？」

訊ねておいて、あれだが、人生経験でいえばはるかに私の方が積んでいるのだが、訊いてみたいことだったのだ。

沙漠脳に性別はない。

身体がないのだから、解剖学的なものや生理学的なものではなく、心理学的なものになれば、あるかもしれないのだが、ディスプレイを挟んだ折衝がよく性別の誤認を引きこすように、身体不在の場合、判断つきかねるものである。

チャットツールによるロールプレイに似ているといえいいのだろうか。現実世界も多分にロールプレイライクな部分があるとはいえ。

それに、どうでもいいことだ。沙漠脳の性別など。

性別が枷になることなど、男女間に於ける友情の有無論争を見れば一目瞭然であるし、同性愛者がいかな正当性ある主張をしようとも、身体的な性は消えはしない。

膣形成も、豊胸手術も欺瞞だ。身体は邪魔、そんな流行歌の一節を思い出す。

むしろ、インターセクシャル スーパーセックス 超越的性別を持つている方が、私の今の問いにニュートラルな答えを返してくれることだろう。陽か、陰かと問われたなら、翳であり光であると答えようぞ。

校門前に人影。

とてもよく知っている人物だ。背は結構高い方。仕事帰りらしく、電気自動車をバックにして、白衣姿のまま立っている。その白衣は、すすけたように灰色で、洗濯していないのがよく解った。

彼は笑顔が眩しく、私の姿を見留めると、爽やかにはにかんだ。

電気ショックを受けたように、私は彼のもとへ駆け寄った。

体力はない方なので、少し、息が切れた。ぎっしり教材の詰まった鞆が重かった所為もあるかもしれない。

下校中のほかの生徒が、訝しむ視線を寄越してくる。

少量の気恥ずかしさを感じながら、シャルルに言った。「別によかったのに……」

「いやあ、心配だったんだよ」

「その……恥ずかしいから」

私は下を向いた。そしたら、頭をぽんと叩かれた。

叩かれた瞬間、どきつとした。私の頭には大きな傷がある。外科手術のあとで、そこを触られると痛い。しかし、いくら、ぽんぽんされてもちつとも痛くない。

自分で触った。手術跡はなかった。

「バカだなあ」

私の拳動がおかしかったからだろう。シャルルは笑った。バカにした笑いではなく、しょうもないヤツだなあといった風で。

「バカって何よ。バカって」

たまらなくなつて、私は彼の胸板をこんこん叩く。

されど、ちつとも、動きやしない。そもそも、胸筋が硬かった。さすがに、一端の成人男性だと思った。研究者が貧弱なんてのは、世間様の偏見に過ぎないのだ。

「まあ、帰ろうか」

シャルルは、車の助手席のドアを開けた。どうぞと、掌で示す。鞆を後部座席に放つてから乗った。

「ありがとう」

「どういたしまして」

私が乗り込んだのを確認してから、シャルルはドライバーシートに座った。

前ボタンをはだけさせている白衣が邪魔らしく、乗る前に彼は白衣の真中のボタンだけを閉めた。まんなか

「今日はちよつと行くところがあるんだ」モーターを起動させながら、彼は言った。

「何処？」

「秘密」冗談めかし、彼はおどけた。

「教えてよ」

「秘密」

「イジワルだ」

私はぷいと彼から視線を外した。車窓から、外景を見やる。そとかけ

既に走り始めた為、加速に従って風景が伸びて行く。

学院区は殆ど中等教育機関で占められている。初頭教育は、自宅でやる場合が多いからだ。

どの校舎もそこそ背位が高く、広い校庭を併設し、その敷地を周壁が囲う。灰色の周壁を私は眺め続けた。

私の不機嫌になったから、シャルルは少々気落ちした声音で言った。「おいおい、拗ねるなよ」

私はシャルルが謝るまで、無視しようと決めた。だから、答えない。無視だ。無視。
シカト

「なあ」

声が少し萎んでいる。本当に、解り易い人だ。心持がダダ漏れで、私より十歳も年長者には到底思えない。顔も童顔と言えるし、二十歳でも通用するかもしれない。さすがにティーネイジャーは無理と
エルダーマン

「なあ」更に声が力を失くして来ている。

私は彼が可哀想になって、うつかり彼の方を振り向いてしまいそうになり、慌てて、自分の首筋を両手で掴む。うん。これで動かない。手の甲に顎先が引つかかるから大丈夫。

すると、今度は身体が振り向こうとし始めた。

なんて、ままらない身体だろう。自分のものなのに。勝手なヤツだ。

「おいおい、大丈夫か」

心配そうな声で訊いてくる。でも、無視だ。

身体がバネのように反発しようとする。必死でこらえた。

「大じよ」

「大丈夫！」

溜まり溜まった反発エネルギーが解放された。

私は身体的要請に逆らえなかった。気持ちも貯蓄されていたように、声も大きい。まるで、怒鳴っているみたいだった。そんなつもりは毛頭なかったのだけれど。

「ごめん……」

「解れば、よろしい」

私は居丈高に言って、胸を反らした。

胸部に違和感があった。何かが引つかかっている感覚がする。

異物？ 自分の胸をまさぐった。

ブラと素膚すはだの間に異物が確かに、あった。シャツのボタンを上だけ外して、確認すると、胸パットだった。

「え……」

入れた覚えなんてなかった。そんなものを入れる習慣も意気地も、私にはなかったはずだ。

自分の胸に劣等感なんてなかった。それなのに、どうしてこんなことをしているのだろうか？ 答えは一つしかない。

頬が熱を帯び始め、紅潮していく顔面を感じる。顔から火が出そうとは、まさにこのことなのだと、実感した。

再び、私は逃げるように外を見た。

「どうしたんだよ……」

耳も真赤になっているだろうに、シャルルは気付いていないようだ。

「何でもない。何でもないっ！」

駄々っ子のように繰り返した。本当は、何でもあるのだ。すごく。

彼の手が私の肩に、優しく触れた。しかも、両肩に。嬉しい半面、はたと浮かぶ危惧。これは。

私は振り返った。

案の定、彼の両手は運転動作から離れている。

「ちよつと、ステアリング！ 握ってよ」

「へ？」 鳩豆はとまめな顔でシャルルは首を傾げた。シャルルは、この危機的状况を全く理解していなかった。

「ステアリング！ 事故るって！」

私は目と指で操舵輪ステアリングを示す。

やっと気付き、彼は呻いた。「あ……」

慌てふためいて、彼は操舵輪を握り直す。

ウインドシールド

前面硝子から透ける、真正面からこちらへと向かってくる車。シヤルルが手離し運転なんかした所為で、対向車線に入ってしまったらしい。警笛ホーンが鳴っている。

ぶつかると寸前、間一髪のところ、車体が傾ぐようなハンドリングがなされて、躲すことに成功した。

事故らなくてよかったと、ほっと一息つく。

「何処に目つけてんだっ！」

対向車のドライバーが、擦れ違い様に罵声を浴びせてきた。当然のことだと思う。

「もう。何してるのよ」私は口先を尖らせた。

「ごめん、ごめん」

シヤルルは後頭部を掻く。また、操舵輪から片手が離れている。

彼はあまり運転が得手ではないから、片手運転だつて危なっかしい。気が気じゃなかった。

「手！ 手！」

「あ……」

「全く。しょうもないんだから……」私はやれやれと肩をすくめた。沈黙が訪れた。

お互い話の継ぎ方を探っていたのだと思う。気まずくはなかったが、私は弾みが欲しかった。だから、沈黙に耐えられず、口を開いた。

「あのさ。行くところ教えてよ」話題を蒸し返す。

「もうすぐ着くよ」

彼は、今日一番の笑みを私に向けた。

車は学院区を抜けて、商業区へ入った。区の変わりを示す銀のプレートが後方へ流れて行つた。

途端に、人の往来が増え、車の行き交いも増す。路面鉄道のレーも本数が増えて、やはり、商業区の活気は一味違つと慨嘆する。

目の先に、舟の内壁を遠景にして、天嶮に映えるは高層モールだ。

これは商業区の中央部にあって、てつきり、くだんの中央方面に向かうものだと思っていた。

しかし、シャルルは目抜き通りへ向かわずに、横道へ逸れた。

急に人氣が減った。喧騒が干潮のように引いて行く。

道は細くなり、まるで　コナプトの枝道のようなと思った。昼間帯なので、暗くはないが、夜間帯になれば結構闇に包まれそうな場所だ。

しばらく道を直進して、更に細い小路へ折れる。

車は次第に減速を始めた。

「ここだよ」

路駐もできないほどの狭い道に車を止め、シャルルは助手席のドアを開けた。

「降りて」

「うん」

降りてから、スカートをはたいた。

「隠れた名店だってさ。食い意地野郎が教えてくれた」

大々的に看板を出してないも、雰囲気から察するに飲食店らしきものが目の前にあった。

やる気がないのか、堅物な職人膚なのか、注意深く探さないと解らないような店名表記はいかなものか。

小さなプレートが門柱にかかっているだけで、まるで表札のようなのだ。

「食い意地野郎？」

「ベックだよ。この前、話したじゃないか」

「　　そうだった？」

ベックなる人物の名に聞き覚えはなく、話された記憶はなかったけれど、初めてシャルルと外で真^{まっとう}当な食事をする。細かいことは胸中にしまい、楽しむべきが最善と思った。

「初めてだね」

「そりゃ、俺だってここに来るのは初めてさ」

微妙に会話が噛み合っていない気がした。

しかし、これも些末と割り切った。

「まあ、入ろう」

立ち話もナンだということで、私はエスコートされて入店する。入っていきなり、生簀いけすが目に入る。

中では、一抱えほどのタコがうねうねと煙けぶるタバコ火のように、泳いでいる。吸盤を壁面にひっつけて、蠢うごいている。

「タコ……」

「タコだねえ」

シャルルは生簀に備わった棒っ切れで、タコをうりうりと突いた。タコは逃げるように潜る。全く、タコも災難である。

「何処で獲とれるの？ これ」

私もタコを突いてみる。案外、その反応は面白い。

タコの目はヤギに似て、嗜虐心を喚起する横一文字なのも原因かもしれない。

「さあ。舟は意外と広いからね」

「ふうん」

私たちはカウンター席にかけた。ほかに客はいないが、閑散としている感じはない。そもそも座席数が少ない所為だ。

カウンターの中から、板前らしい浅黒い膚の男が、「いらっしゃい」と適当に言った。一分の誠意いちびんもこもっていない。サービス業つてものが解とつてないんじゃないかと思った。

不安だ。マトモな料理が出てくるのか、が。

食意地野郎というのは、単なる大食いで、とりあえず腹を満たせといった風情のド力盛り料理が出てや、こないか？ 私は食が細いので、そういう類のおすすめは遠慮したい。

「何、食べる？」

ここは「タコ」と答えるべきだろう。

自信満々に、そう答えると、シャルルは変な顔をした。「タコ？」と確認するように、私に訊く。

「そう、タコ」ここは譲らない。

「タコを……」

シャルルは何だか気に入らない様子だ。

イービルフィッシュがそんなに食べたくないのだろうか？ 食わず嫌いはあまり、褒められるものじゃないと思うのだけれど。

「それで、ここって何屋なの？」

「寿司屋らしいよ」

「らしいって……、はっきりしてよね」

「は……」頼りない顔を彼はした。

「はい、お待ち」

ゲタに乗った寿司が、眼前に置かれた。でかかった。一掴み大のサイズだ。

寿司とは、こんなに巨大だっただろうか？ 一貫が、四貫分くらいの米量こめかさを持ち、且つその上にタコの足ではなく、ボイルされて赤みを増したタコの、頭じみた腹部の切れが乗っかっているのだ。

「大きくないですか？」

私は板前に訪ねてみた。

板前は、むすっとした表情でぶっきらぼうに「江戸前だからですよ」と答えた。イマイチ、意味が解らなかった。

とりあえず、ゲタには二貫乗っていたので、一個シャルルの受け皿に渡した。シャルルはやっぱり、変な顔をした。

私は自分の分を、醤油にひたすことなく頬張った。当然のように一口では食えず、その上、タコはうにうにして軟硬やわかたく、噛み切るのに手間取った。

タコなる生き物を初めて食べた。

ケミカルな味がした。不味いではなく、ケミカルとしか表しようがないのだ。私の味蕾みらいがバ力でないなら、それでいいはずだ。

こういうのもありかもしれないと思った。意外とおいしかったわけ、つい、がつついたのが運の尽きだった。

私は咽にシヤリを詰まらせた。息が止まる。焦った。空気が吸え

ない感覚というのは、ものすごく焦燥感を煽りたてる。

前かがみになって、けほけほと咳き込む。気道に入ってしまった米粒が、吹きだした。

「おいおい、落ち着きなよ」

シャルルが私の背中をなでた。

唐突に、嘔吐感が込みあがった。胃が収縮するのが解った。

何だろう。この感覚。ケミカルな味。違う、あれは本当の意味でケミカルな味だった。だって、薬品だったのだから。

私は米にまみれたタコを吐いた。唇と吐瀉物の合間に唾の糸が光った。

菌型のついたタコの切れっ端は、確かにイービルフィッシュに違いなかった。おぞましがやってきた。

私は、視線をシャルルに向けて 畏怖に駆られた。彼は晒っていた。チャールズの笑みで。鉄面皮のような下卑た微笑が、彼の顔面に張り付いていた。

頭が痛い。じんじんする。

私は偏頭痛持ちではない。生理の日だって、体調を崩しにくい。体力はなくても、病気には強い。対抗力のある身体なのだろう。

この頭痛の理由は何だろうかと考えた。

思い浮かぶ節は多かった。たとえ、対抗力があるにせよ、限界がきたのかもしれないと思った。

動悸が高まっていく、背中を伝う脂汗。

息が濃密に感じられるようになり、座っているのも億劫になって、私は実験室の床に横たわった。

私が仰臥した所為で、ジャングルの草葉が揺れた。

木の枝と葉の狭間から、雲の流れが見えた。ゆつくと、雲は動いている。安らかな流動だと思った。

口中から抜け出る、吐息がやけに湿っていた。

唇が湿気た。

気がつくと、自宅のベッドに寝ていた。柑橘系の臭いが鼻を突いて、覚醒した。

目がちかちかすると思ったら、電気が点いていた。

私は電灯を点けっぱなしでは、眠れない性分なので、普段は消している。だから、慣れないことをされて、瞼の中の眼球が苦悶の音をあげたんだろう。

「あれ……おかしいな」呟く。

まだ意識が、ぼうつとする。

最後の記憶では、実験室で倒れたはずだ。どうして、家にいるのだろう。

普通なら、誰かが運んでくれたのだと思うところだが、あいにくと私はそうは考えない。だって、私のことを気遣う人間がいるはずがない。

では、誰が？ だから、誰も運ばない。

私は手がかりを探そうと上体を起こして、自室を見回した。答えはすぐに見付かった。

部屋の隅っこに、介助マシンがいたのだ。

丸を基調としたデザインに淡いブルーの塗装を施された介助マシンは、私の覚醒に気付き、ベッドへと迫ってきた。キャタピラ式の移動機構が床を擦って、きゅるきゅると音がする。

マシンは私に相対すると、メカらしい挙動で一礼した。

「シャルルさまの命です」

マシンはそう告げた。我が耳を疑った。

「へ？」相当マヌケな声が漏れる。

「そう言うように仰せついております」

妙な言い回しだった。引っかかる。

私と向かい合う介助マシンは公共のものではなく、個人所有のものだ。

その証拠に額のあたりに、所有者のイニシャルが入っている。A・

F。シャルルでは、当然ない。

インベラティヴ
「命令人は誰？」

「いません」マシンは即答する。

「どういうこと？」

「いません」

舟の中のあらゆる電子式のマシンは人間の統制下で動き、自律はしない。だから、命令人がいるはずなのだ。いないのはおかしい。

「そんなはずはないでしょう？」

「私は命令を受けました」

要領を得ない。話が噛み合っていない。

「じゃあ、メモリーを見せてくれない？」

「プライバシーです」

マシンは腕を差し出して、これの胸のパネルを外そうとする私を制止させた。

「見せなさい」

マシーナリーに語気を荒げても意味はないのだが、私は強い調子で言った。

当然のように、何ら揺るぎない音声でマシンは答える。「あなたに命令権はありません」

こう言われては、どうにもならない。

無理やりに、これからメモリーを引き抜くこともできない。マシンの力に、私が抗し適う道理があるうはずもなく。

私はシコリを残しながらも、引き下がった。

「じゃあ、出てって」

そんざいに手を振った。

介助マシンは再び一礼すると、滑るようにして私の部屋から出て行った。

自動扉が閉まるのを確認して、私は電気を消した。扉に鍵はかけなかった。どうせ、意味がないのだから。

もっとも、彼の^かマシンの命令者が嘘をついている理由は解っては

いるのだ。

私を助けることが、どういふことか？ 皆、知っている。

三章

三章

私と沙漠脳のコンタクトは続いていた。

一人で実験するようになってから、すでに二ヶ月近くが経過している。その間、私は一度もスティックを挿すことはなかった。

「おはよう。今日も水をあげるから」

私は持参した折り畳み椅子を展開して、沙漠脳のケースの横に設置した。

そして、腰を据えた。最近は毎日、持ってきている。ついでに、弁当も用意している。一緒に　とはいっても私しか食物を必要としないのだが　食事をする為だ。

この方が、落ち着いて話もできるし、腰の負担も減るし、シンパセティックな気分になれるからだ。

一番の理由として何より、沙漠脳と同じ目線に立てることも大きい。

「今日は、何を話そうか」

額をさすりながら、思索した。

話すこともネタが切れていたの、結構長く考えた。

「そうだ」

私が彼に話しかけようとしたとき、不意に地面が揺れた。折り畳み椅子の脚^{あし}がかくかくと音を出す。

「何？」

勿論、誰も答えてはくれない。

靴底から鋭敏に伝わる震えは、収まらない。振動はそこまで大きくはないが、舟が揺れること自体があつてはならないことだ。

私は膝に置いていたランチボックスを落とした。ボックスは、ジヤングルの草の中を転がる。映像の木々をすり抜けて、結構な遠方

まで跳ねて行った。

沙漠脳の心象風景が揺らいだ。
彼も何かを感じているらしい。

『 警報……』

研究室のスピーカーが告げる。続いて、耳をつんざく電子音。き
いんと耳朶がハウリングするような感覚に囚われた。

「警報？」

隕石と衝突でもしたのだろうか？ 何処その恒星の引力に囚われ
たのか？

私は色々な可能性を吟味した。音声がはっきりしない所為で、聴
き取りにくい。スピーカーに傾注する。詳細を得る為に。

『 敵襲 』

はつきりしない、ぶつぎりの音声が継がれた。

「敵？ 何それ！」

敵って何だ？ エイリアンでもやってきたのだろうか？ それと
も、ミリティアが遂に反旗を翻したか。

耳を澄ますも、それ以上スピーカーは何も言わなかった。

「沙漠脳！」私は、叫んだ。

逃げなくちゃならない。何処へ？ 沙漠脳も持ち出さなくては。

私は沙漠脳をケースから外そうとして、踏みとどまった。持ち出
してしまつて、それは正しい判断といえるのかどうか。

沙漠脳は敵から、どのような存在として認識されるか。排除対象、
攻撃対象になる可能性は私より低いはずだ。

ここに置いて行った方が安全だと結論して、私はケーブルジャッ
クにかけた手を離れた。

ケースの天辺を軽く叩いた。

「ちよつと、行ってくるね」

それだけ言つて、実験室を後にする。

実験室を出ると、廊下に予想外の人物 シャルルが立っていた。
私は吃驚した。彼はここには二度とこないと言つたはずなのだ。

くるはずがないと、目をこすり、それでも彼は私の前に確かに存在した。

彼は近年見たことのない、爽やかな笑顔をたたえていた。

「どうしたんですか……シャルル……」

言ってしまったから、悔いた。また、どやされる。身構えた。名前を間違えた。

しかし、待てど暮らせど、彼は何もしてはこなかった。それどころか、彼は右手を差し出して、微笑んだ。

「行こう」とシャルルは言った。

「何処へです？」

「ついてきて」

彼は私の手首を握って、引いた。私はなすがままにされた。

研究所の廊下を二人で走った。

廊下に、さきほどの警報で恐慌を来たしてしまった研究員たちが、青い顔で右往左往しているのが目に入る。

口々に、何かをわめいているが、あまりに人々の利己が錯綜していて、聞き取れない。警報もやまず、間断なくビービー鳴っている。恐慌が過大で、動くこともままならなくなり、床に伏してしまつた人も見受けられる。

彼らの足は尋常ではなく小刻みに振動していて、歩けないのだろ
うとを感じる。恐怖の煽りを食らいすぎたのだ。

泣いている人もいた。

なぜか、怒り狂っている人も。

何だろう。これ。司令部は何を考えているのだろうか？ これでは

逆効果じゃないか。却って、混乱をまねく。

そもそも、敵が何か、何者か、はつきりしていない。私だって、少しは焦っている。幸中^{さいちゆう}にあつた人ならば、相当に取り乱すことは明白なはずだ。ちよつと、思案すれば解るはずなのに、司令部は勇み足だと感じた。

私はシャルルの背中を見ながら、訊く。「敵って、敵って何です

か！」

彼は振り返らず、答える。「敵はすでに舟に満ちている」

「え？」

「だから、脱出しなくちゃいけない」

「脱出？ でも」

舟の外に出てどうするのだろう。

人間は宇宙空間じゃ生きていけない。新世界、新天地とされる惑星まで、まだ距離があるはずだ。脱出ポッドでは到達できないと思われた。

「いいからっ」

「はい……」

私は黙って、従った。彼に従順な態度を示すのは、パブロフの犬のようなもので、身に染みた反応なのだ。

第四ラボの玄関を抜けると、視界が開け、車道が見えてくる。

道は、これでもかと渋滞していた。何処にこんなにたくさん電気自動車があつたのかと思うほどに、ひしめきあっている。

警笛が空間に鳴り響き、路傍に備え付けのスピーカーから警報が一向にやまずに垂れ、人々の怒号は絶えず、この世の終りとでもいうように、煩い。

しかし、この避難民たちは何処へ行く気なのだろう。

シャルルの言う通りに舟が占拠されているなら、シェルターに逃げても意味がないし、脱出ポッドで逃れ出ても、近くに人間の棲める惑星や人工衛星、コロニアがないと宇宙葬になるに等しい。

「歩いた方が早い」

言うが早いか、彼は車道をつっ切る。車の間隙を縫って、車道の反対側へ至る。

歩道を駆けた。進行方向から推測するに、目的地はこの区画の脱出ポッド置場と思われた。

私は息があがってきた。視界が霞み始める。運動不足がイヤが応にも感ぜられた。

「休憩させて」と言いたかったが、言えない。逆らうのが恐かった。すると、シャルルが振り返った。そして、信じられないことに「休もうか」と言った。

私は両眼を白黒させた。きつと、呆けた顔をしていたはずだ。変だ。今日のシャルルはおかしい。まるで、最初に会った頃に戻ったみたいなのだ。まるで、シャルルではないみたいだ。彼の本性ははたして、こっちなのか、あっちなのか、迷う。

私の訝りを察してか、彼は難しい顔した。

しかし、何も言いはせず、近くの石塀に背中をあずけ、座り込んだ。

手招きされて、私も彼に続いた。真隣に腰を落とす。石塀はひんやりとしていた。道路も冷えていて、臀部がつーんとした。

目の前を人々が駆けている。

私たちに一瞥をくれてから、去って行く。

彼らの顔には、一様に「何をやってるんだ」と書いてある。確かに、私には生存欲求が不足しているかもしれない。けれども、その分、盲目的になったりはしないと思う。

何十人もの人々が過ぎ去って行くのを、フィルム映像のように見ていた。時間の流れがゆっくりとして感じられた。

突然、頭が飛んだ。赤い飛沫が舞った。

「え？」

赤黒い液体が道を汚す。頭部を失くした身体は、力なく道路に倒れた。

事態に気付いた人は、皆目を大きく見開いて、足を止めた。

「何これ……」

頭を失したのは一目散に脱出ポッドか、シエルターを目指していた人物のものだ。

何が目の前で起こったのか、全く解らない。

人が死んだ、殺されたことは解るけれど、その原因が不明。

私が焦燥している間に、もう一つ首が散った。甲高い悲鳴があが

った。

さきほどまで、足を硬直させていた人の多くが、蜘蛛の子を散らすように霧散した。パニックは加速度的に増して行く。

今度は原因が解った。

首なし死体から、百メートルほど離れた場所に緑の軍服を着たミリティアの兵士たちがいて、彼らは銃器を抱えていた。抱えているだけではなく、銃口がこつちを向いていた。

「敵って……」

敵の正体が判明した。私の予測の一つが当たっていた。

敵とは、ミリティアであったのだ。遂に、司令部に呐喊を始めたわけだ、牙をむいたわけだ。その契機となった理由は解らないが。

「あれも敵だ」

シャルルは恬然^{てんぜん}とした態度で言い、私の肩を叩いた。もう、私は彼から恐怖を覚えなかった。

「あれも……ですか？」

無言で彼は頷く。神妙な面持ちだ。

「いたぞっ！」ミリティアの一人が大声をあげた。一斉に軍服たちの視線が、私たちに注がれた。

撃たれる！　と思った。無意識に瞼が閉まった。身体の防衛反応だ。

シャルルが私に覆いかぶさってくるのが、解る。体温を私の表皮が感じた。

震えた。

死を畏れた。恐怖が湧いた。長らく忘れていた本物の恐怖な気がした。

。いつまで経っても、私は殺されなかった。弾も私たちの方へは飛んでこなかった。

恐る恐る瞼をあげると、戦場があった。

憲兵隊とミリティアが撃ち合っていた。

青い制服の憲兵が、嶮しい顔で緑の軍服を撃つ。他方、ミリティ

アも負けじと撃ち返している。

機関銃の音色がシンフォニーになって、主旋律は人のわめき声。蜂の巢死体がいくつも生まれている。巻き添えをくらった市民もいれば、兵士も憲兵もいる。

私は冷静に、火を噴く銃口を見た。断続的に火花が散っている。口から立つ硝煙が、周辺一帯へと充満する。瞬く間に、空気が汚れて行った。

いまだ、私に被さったままのシャルルが私を覗き込みつつ、言った。「今のうちに行こう」

私は頷き、彼の手を握った。今まで覚えたことのないレベルの、頼り甲斐を感じた。

私たちは、戦闘を避けて脱出ポッドを目指した。兆弾に気を配りつつ、他人を盾にもした。

背に腹は代えられないのだとシャルルはモノローグのように、何度も告げた。私は首肯して、従った。

脱出ポッドが近づくにつれ、益々人の勢ぜいが増えてきた。

皆、目指す場所は一緒らしい。ただし、シエルターに入ろうとする人間が少ないのが気になった。

途中、シエルターを通り過ぎたとき、わけを知った。

シエルターは意味をなしていなかった。

完膚なきまでに破壊されてしまい、機能を失っている。強化建材でできた枠組みも全く耐えることもなく、瓦礫の山になっているのだ。

ミリティアがやったのだろうか？

しかし、彼らにそこまでの力があるとは思えなかった。舟には大量殺戮兵器は、ほとんどないのだ。そして、舟が難破しても耐え得るようにと設計されたシエルターが、そう簡単に壊れてしまう道理はない。

もしも、そんなことが可能なものが存在したなら、即時内紛が起こる。人は暴力に魅了されてしまっし、力を持ったら、使っ

まう宿命にある。

実際問題、今、膚で感じられる領域で内乱が起こっていることは確かだけれど。

「ちよつと寄り道するから」

言つとシャルルは脇道へ入った。私もついて行く。

脇道の終点にあるのは、シェルターのそばにあるBC兵器用の兵装が備蓄されている場所だった。

頑丈な金属製の扉があった。シャルルはそれについた開閉輪を回した。鈍重な音を立てて、扉は開いた。

備蓄部屋に入るなり、彼はひつたくるように壁に吊るされていたガスマスクを取って、私に被せた。

いきなりだったので、髪の毛が絡まり、引っ張られ、痛かった。

「痛い」と言ったら、やり直してくれた。

部屋には、私たち二人以外はいなかった。

近隣の住民および勤務人には、もしもに備えるように通達がなされているはずなのに、私たち以外誰もいないのは、やはり、司令部の早合点の所為に違いない。皆、冷静な判断ができない状態になっているんだろう。

「これは……」ガスマスクについて訊く。ガスマスク越しの音声は、くぐもつていて、自分の耳朵に届く音声も、いつものそれと異なつて聞こえる。

「早く」と、急かされて、ガスマスクのバンドを締めて、固定した。外気が直接入らないよう、念入りに締める。

「シャルルは、被らないのですか？」

「俺はいいんだ」

私は首を傾げた。彼は、ただ笑うだけだった。

彼は部屋の扉を閉めた。きちんと、内部ロックをかけて、私の方に向き直った。

「しばらく、ここにしよう」

「解りました」

私たちは、部屋の中央にある備品の詰まった鉄箱の上に腰を据えた。

何とはなしに肩を寄せ合った。雰囲気からではなく、疲れの占める割合が、私の場合は多かった。

ひとたび、一息ついてしまうと、唐突な警報に驚き走ったり、戦闘を目撃したりした所為か、疲労感が津波のように訪れた。

この場所ならば、安心という側面もあったのかもしれない。

私は眠ってしまった。

起こされるまで、自分が眠りに落ちたことにすら気付かなかった。泥のように睡眠の淵へいざなわれた。

最初の話。最初の物語。

人間は誰もいなかった。

獣も、鳥も、蟹も、魚も、木も、石も、洞^{ほら}も、谷も、草も、一切がなかった。唯一、空だけがあった。

地表さえ、定かではなかった。区切りが不明瞭だった。静かな海と、やはり、際限のなく亘^{わた}る空だけがあった。

音もなかった。寄り集まり、物音を立てる存在がなかった。空にも、揺れるものもなく、騒ぎ立てる存在がなかった。

立つものはおらず、水は淀んでいた。海は安らかだった。生を授かることはなかった。

暗黒と夜は同義にて、不動と静寂だけが支配した。

六柱の神が、水のなかに輝いた。彼らは碧の羽に包まれていた。そして、みつつの精神の重なりである『天の心』があった。

ここに来て、初めて言葉が生まれた。神テペウと神グクマツツが語らったからだ。

彼らはそこで、人類を創造すべきだと感じられた為に、夜の間に、天の心の一体であるフラカン^{フランク}は創造の手筈を整えた。

天の心と共に、テペウとグクマツツは光と生命について議論した。どうしたら、光が満ち、生命が生まれ、穂が実るだろうかと考え

た。

「かくあれ」

「空間よ、充ちよ」

「水よ、去れ」

「大地をその姿を見せ、固まれ」

「明るくなれ」

「天と地に曙よ、来たれ」

口々に神々は叫んだ。

「人の世が来るまで、我らの創世には、栄光は与えられないだろう」
二柱の神が言った。

大地は霞のように、海面からせり出て、山となった。同時に谷が生まれ、松林や杉林がその表層を覆って行った。

グクマツツは喜んで、言った。「天の心、クルハー」フラカン、チピ」カクルハー、ラハ」カクルハー！あなたは偉大だ！」

しかし、「私のすべきは、終わった」と天の心は答えた。

その後、テペウとグクマツツの二柱の神は、念入りに世界を創って行った。

工夫を凝らすごとに、世界は複雑になって行った。

こうして、世界は『天の心』と『地の心』とで担われた。

「それじゃ、行こう」

背中を叩かれて、目を醒ました。

一瞬だけ、自分がいる場所が解らなかったが、すぐに目覚めた。
私はシャルルの顔をみあげた。

再び、手を引かれて、部屋を出た。

密閉扉が開かれた瞬間、舟の中とは思えないほどの緑の臭気がした。草臭く、木の汁臭い。

目前に広がる景色は最早、舟の中ではなかった。

ジャングルだった。それ以外の何だといえればいいのだろうか。そう、ジャングルだったのだ。

そして、私は眼前の風景に見覚えがあった。毎日、毎日、目にしていたものと似ている。 沙漠脳の心象風景が、舟全体を侵食しているのかと思った。

「森？」

私は、シャルルへ視線を向けた。

問いは、半分自分にかけたものだ。自らに確認する為に。
「そうだよ」

やや事態に対し慌てている私に反して、彼は泰然としている。まるで、最初からこうなることが解っていたみたいだ。

その落ち着きぶりは、包容力にも似ていた。

鬱蒼としたジャングルの中に、人影は一つもなかった。

今まで、たち込めていた喧騒もそっくり消えている。鳥のさえずりばかりが聞こえて、夢でも見ているみたいだった。

まだ、夢中かもしれない。私はまだ、備蓄部屋で寝入っている？ いや、初めから夢だったのかもしれない。だって、シャルルが別人のようなのだから。

夢たれば、それはそれで、構わない。私はこのままを受け入れた。顔面に手を当てると、ガスマスクが消えていた。振り返ると、備品部屋の出入り口が綺麗さっぱりなくなっている。

皆、何処へ消えてしまったのかと、私は目でシャルルに問うた。彼は首を横に振った。この行為の意味するところは汲めなかった。私たちは、無人の森を歩いた。もう、シャルルは走ることはなかったから、私も楽しかった。敵はいなくなった。だから、走る必要もない。

太い丸太のような蔦をくぐった。

小さな河を飛び越えた。

大きな勾配を昇った。

シャルルが何処を指摘しているのか、皆目検討もつかなかった。それでも、悪い場所へ向かっているとは考えられなかった。

だから、私はついていった。これは、恐らく夢の中なのだ。私は

まだ、眠っている。そう、思った。

ときに、彼は私を介助した。

ときに、私も彼の後を押した。

そうこうしているうちに、木々の数が減り、低木ばかりになっていくことに気付いた。しばらく進むと、低木もなくなった。人に整備されたとは思えないフラットな土地が広がった。

私たちは、ピラミッドの上に立っていた。

土に埋もれた、その天辺に立っていた。長年の歳月が、ピラミッドを覆い隠し、私は登りきるまで気付かなかったのだ。

天辺からは、緑の地平が見渡せた。壮観だった。

見渡す限りが緑だ。

何処まで行っても、青々しい。空は清澄にして、静寂であった。

「見えるかい？」

シャルルが訊いたので、私は彼を見上げ、「うん」と答えようとした。

「見るなっ！」

シャルルが怒鳴った。

首筋がびくつとわなないた。私は、シャルルを凝視した。

おかしいと思った。なぜなら、彼の口は動いていなかった。怒鳴った様子もなかった。私の態度がおかしくなったので、不安の色が浮かんでいるだけだ。

「見るなっ！」

また怒鳴られた。そして、やっぱり、目の前の彼の唇は微動だにしていない。今回は、ずっと彼の顔を見ていたから、間違いない。変だ。

何かがおかしい。いや、すでに周りで起こっていることはおかしいことばかりだし、これは夢だとすれば、支離滅裂なのはしょうがない。けれど、私にはとても現状が虚構には感じられなかった。

「何処ですか？」私は訊いた。大きな声で、シャルルを捜した。私の傍らにいるシャルルではなく、私を怒鳴りつけているシャルル

を捜した。

「どうしたの？」シャルルが困惑気味に言った。

「声、声がする……」

「声？」

「耳を貸すなっ！」

「うわぁっ！」咆哮した。二人のシャルルの声が錯綜する。耐えられない。

私は、耳を塞いだ。指先を突っ込んで、蓋をした。

それなのに、判然と聞こえる。「見るな、聞くな」と声がする。

声は止むどころか、ずんずん音量を増大させて、私に迫る。

声は全方位から、舞い込んで来る。まるで 脳の中に響くような。

目を閉じて、かぶりを振った。頭中から、声を追い出したい。だから、がंगाんに首を回す。けれど、声は去らない。

肩を抱かれた。

抱き寄せられた。

「大丈夫？」シャルルが優しく訊ねてきた。

「あ……う」

再燃した。恐怖が。絶叫して、彼を突き放した。

彼はたたらを踏んで、こけた。私も反発で、後につんのめった。

「だから」

「来ないで……来ないで、ください……」

私は顔を伏して、目を閉じて、走った。がむしやりに走った。

ピラミッドを下り、ジャングルの中を進んだ。不思議なことに、

何の感覚もしない。葉が自分に触れる感覚も、何もかも。

感覚が喪失したような気分に分われながらも、走る足をとめなかった。木の根も、蔦も私を妨害せず、触れる感覚もなく、ただ風を切る触覚だけを覚えた。ぴゅうぴゅうと風切音だけが、耳に入る不思議な感じ。

突然、何かにぶつかった。したたかに、頭を打った。木の幹で打

った感覚ではなかった。頭蓋が割れるかと思うほどのレベルの痛みだ。

私は、反発に後方に転んでしまった。腰の辺りも強く打った。これまた、硬いコンクリのようなものに打ち付けたような痛みがした。痛みが漸次引いてから、瞳を開けて、周囲を確認すれば、案の定、樹木はなく、目先には高くそびえる壁があった。灰色の壁がだった。自身の背丈の何倍もある天井を持ち、サッカー球場よりも広い面積を有する部屋に、私はいた。

木々など一本もない。地面もなく、人工物であることが明白な床がある。

私がいる場所は、脱出ポッドの格納庫と思われた。

だとすれば、壁と床から上方へ伸びたハンガーには、卵型の白いポッドが満載され、並んでいるはずだった。しかし、有視のうちには、一機も残っておらず、部屋はがらんとしている。

ポッドを欠いて、からっぽになったハンガーが虚無的な感情を喚起させた。

人っ子一人いない。既に、皆脱出してしまった後なのだろう。

ここにきて、疑問が湧く。私は、なぜ？ ここにいるのだろうか？ 私はさっきまでシャルルと夢じみた景色の中を歩いていたのではなかったか？ 自分は夢遊病者にでもなったのだろうか？

答えは出そうもなく。

唐突に、私は頬がひりつくのを感じた。

何だろうと思って、手を当てると、こつんと何かに指先が当たる。ガスマスクだ。

私は、ガスマスクを外した。毒ガスでも充滿していたら、死ぬかもしれないが、完全に外してしまっても、死はやってこなかった。

指先で触れた頬には、乾いた泪の粉があった。ぱさぱさしていて、結構前に流れた泪のようだ。

泪のわけは、何だろう。頭がぼやけて、考えが巡らせられなかつ

た。

ただ、少なくとも、脱出できなかったことが悔しかったわけじゃない。それだけは確かだった。

私は、呆然と閑散たる大部屋を見続けた。

四章

四章

開放的な空間設計の舟のブリッジは、ひとときの休戦状態にあった。敵を殲滅できたわけではないが、一旦は退けたといえた。

各員のモニターにも、ブリッジの上方に備え付けの大型ディスプレイにも、危険な情報の表示はない。

「艦長」とオペレーターは言った。

ブリッジで一番豪華な椅子に座る艦長は、おとがい頤に手をあてて、唸った。

ぞんざいに投げたした他方の手は、オットマン（肘掛）にだらしく下がっている。その手は結構な数の皺があり潤いはほとんどなくしており、上唇まで伸びた白い髭と相まって、六十代前後と思われる年恰好。

「なんだ？」と横柄に彼は答えた。

「ラベルA、活動低下」

「破壊したのか？」

「いえ、解りません」

神妙な顔に、苦悶の色を混じらせ、オペレーターは答える。

「使えんヤツだ……」艦長は吐き捨てた。

そして、首を一度回すと、「やつは、何処から侵入したのだ？」と訊ねた。

「不明です」苦々しくオペレーターは言う。

「兆候もなかったのか？」

「ログを見る限りは……」

オペレーターはキーを叩いて、艦長のデスクにまとめ報告を送った。

しかし、艦長は転送されてきたそれをすぐに削除した。最初から、

閲覧する気はなかった。

彼は、事態の異常性と緊急性をきちんと把握はしていたが、真面目に対処する気はなかった。面倒ごとは、全て部下がやればいいのだ。自分は、ただ「やれ」と命令すればいい立場なのである。

「どうして、今まで気付かなかった？」

「ですから、兆候がなかったのです」

苦しい面持ちでオペレーターは首を横に振る。

彼としても侵入者を自分の能力の限りを尽くして、捜査したのだ。今でも、自作のソフトウェアを艦内システムに走らせている最中だ。「役立たずめが……」

艦長は蔑むように彼を見やってから、咽を鳴らし、ブリッジの床にためらうことなく、唾を吐いた。

その行為に対して一様にクルーが顔をしかめるが、当の本人は気付かない。

「……そのようなことはやめてください」一人、勇気あるクルーが苦言を呈す。が、当の艦長は「何がだ？」と言って、終いだった。

「で、正体も解らんのか？」

「全く……」

「仕事をしろ」

「と、言われましても……最善は尽くしているのですよ」

「どうだか！」艦長は鼻で哂った。

「こんなことになるくらいなら、生体脳にさっさと切り替えておけばよかったのだ」

「しかし……研究機関の方からは、不完全と……」

「現状のシステムの何処が完璧なんだ？ 言ってみろ」

オペレーターは口をつぐんだ。完璧ではないから、敵の侵入を許してしまったのだ。反駁しようがなかった。

「ほれ、見る。だから、俺はさっさとしろと催促してたんだ。感情性プロテクトの複雑性はとくに証明されていたではないか？ 何の為に、第四ラボなんぞに資金を与えたやつたと思ってる？」勝ち

誇ったように艦長は朗々と長口上を告げる。

彼の言葉に、気圧されて、沈黙がブリッジを支配した。

沈黙を破ったのは、一人のオペレーター。

「艦長」と呼びかける。

「何だ？」

「第二波きます」

別のオペレーターが叫んだ。語尾はかなり裏返って、半ば悲鳴と
とれなくもないほどである。

「もうかつ！ プロテクトはどうしたっ！」

「間に合うものですか！」

絶叫に近いクルーの声がブリッジ中を反響する。

「間に合わせろっ！」

「だめです。侵入者は二つ！」

艦長は身を乗り出す。「新手か？」

「ラベルAは前回と同じ、アクセスポイント及び、所属共に不明の
ままです。新規、ラベルB。ミリティアと思われます」

「うぐ……」呻いた。

「どうしますか？」

「どうするもこうするも、ないっ！ アンチボディを撒け」

「前回、通用していませんが？」

「文句を言っなっ！ ミリティアなんぞに、この舟のシステムが破
れるものか。いいから、撒けっ！」

艦長も、最初の侵入者ラベルAにアンチボディが通じないことは
解っていた。さきほども殲滅されたばかりで、たまたま、何が敵に
あったのか知らないが、ラベルAの活動が低下した為に難を逃れた
だけだ。

故にアンチボディを撒く意図は、ラベルBに通じればいいというも
のだ。ラベルBがミリティアならば、尚のこと。ミリティアは司令
部の確固たる敵であるのだから。

「散布」と主任オペレーターが声を出す。

続いて、彼の部下が「「散布」」と唱和。

各システムを担当するオペレーターそれぞれが、自分の担当領域にアンチボディを撒き始める。

ブリッジ中央にホログラフィックで情報を描き出すモニターに、ことの経過が表示され始めた。視覚的に艦内システムを表示した図に、白い点が無数に表れる。

赤い二つの点に対し、幾つもの白い点が攻勢をかけた。白い点はアンリボディで、赤い点はそれぞれ、ラベルAとBだ。

クルー全員がモニターを息を吞みつつ、注視する。

モニターは十六分割されて、各セクションに於いてのアンチボディと侵入者の、領域制圧率が示されている。

アンチボディは次々に侵入者に問答無用で襲い掛かったが、次から次へと撃退されて行き。数を減らす。アンチボディの残存数を示すカウンターの数値が激しい速さで減って行く。劣勢は明白だ。

アンチボディの散布から五分、『消滅』の文字がセクションの一つに発生。次々に、他のセクションにも『消滅』のサインが現れ始め、十分も経たぬ間にカウンターの数値はゼロとなった。

「ラベルA、アンチボディを殲滅」主任オペレーターが報告。半ば、諦めてしまったのか彼の口調は淡々としている。

「ラベルB、セントラルに取り付きました」

「くそが、ミリティアめ、便乗しおって……」

艦長は齒軋りをした。

全てのアンチボディは、ラベルBに接触する前に、ラベルAによって狩られ尽くしたのだ。

鎮痛な空気がブリッジを満たした。

赤い点で表示されるラベルAは、舟のシステム中枢に既に入り込んでいる。システム中枢の制圧は時間の問題と思われた。

艦長はオットマンを思いつき叩く。強く力を入れすぎ、自分の手が痛いくらいだ。手の脇をさするうと、目を落とそうとした瞬間。

モニターに無数の横ラインが走った。続いて、画面は壊れてしまつたかのように、砂嵐が生まれた。

「何だ……？」

映像が、刹那に切り替わる。

いかつい顔の男が画面上に、現れた。緑の軍服を折り目正しく着ており、一見でミリティアの関係者であることが解る。

「こんにちは、艦長。お久しぶりで」

男は不敵な笑みを浮かべながら、自信たっぷり小さく一礼する。

「きさま！」

大口をあけて、艦長は怒鳴った。ブリッジ一帯に彼の声がエコーを刻んだ。

「きさま、などと呼びたいのはこつちですよ。裏切りもの」

侮蔑のこもった眼差しが、艦長を威圧する。

「ふん。おまえらが不甲斐ないからだ」負けじと艦長も受け答える。

「不甲斐ないのはどつちでしょうね。今、苦労しておられるようですよ？」

「黙れ……」

苦虫を噛み潰した顔で、艦長は吠えた。

一方、男は何処吹く風で艦長から発する激情を受け流して、さもバカにした様子で笑った。

「自業自得ですね。もっとも、我々としても今回の想定外でしたかね。しかし、機はとづくに、熟していましたからねえ。ようは、きっかけがなかっただけです。それ、そろそろ、物理的な部分でも、負けますかね？」

「……」艦長は押し黙る。

すでに、電子戦に破れてしまった司令部陣営。物理的な敗北とは、憲兵隊が負ける、もしくは、とうに負けているということだ。

「長かったですね。十余年」

「どつという意味だ？」

「別に？」嘲るように男は笑んだ。

「きさまらこそ、不甲斐ないんじゃないか？」艦長もまげじと鼻を鳴らす。

「それはしょうがないものですよ。あなたは結局、全権を手放さなかったんですからねえ。それでも、我らを潰さなかったのは、良心ですかね？」

「遊び心かもしれんな。カスが」

「その高飛車な態度が今回身を滅ぼしたわけですねえ」男はほくそ笑む。実に楽しそうに映る。

「ふん」

「でもいいんですかねえ？ システム、ハックされますよ？」

「きさまらだけでも始末してやる。アンチボディ、撒け」

「しかし……」

主任オペレーターは口ごもる。

「今なら、こいつらだけはやれるだろう？」

ラベルAは中枢への進入に躍起だ。チャンスは今しかなかった。

「は……はい」

「手遅れだと思いますがねえ？ 先行の侵入者を排除できないんじゃないんじやねえ」

「黙れ」

「それにですね。既にセキュリティは突破したあとなんですよ？」

艦長の顔が驚愕に染まった。

「……きているのか？」

「当然じゃないですか。前艦長を放逐したあなたが、まさか、こうなることも予測できなかったはずはないでしょう？」

「むう……」

「まあ、前艦長がその度量ゆえに我らに負けたのなら、あなたはそうさしずめ、バカさ加減によって負けたといいましょか？」

男の顔は勝ち誇っている。

「黙れ……黙れ」

「あぐらを掻くと口くなことがないってことですよ。せいぜい、あ

の世で悔恨して、告解してください」

「……」

「お、着いたかな」

男の発話とほぼ同時に、ブリッジの後方の密閉扉ががんがんに鳴らされた。続いて、ミリティア兵と思われるものの、「開ける」の声。
「艦長っ！」

女性のオペレーターが、不安に駆られ、叫ぶ。

彼女は指示をあおいだつもりだった。けれど、艦長はそんな言葉に耳を傾けてはいなかった。

彼は自分のことだけを考えていたのだ。

「甘いぞ……俺はそう簡単に死なん」

言つと艦長はオットマンの端を叩いた。すると、その表面が爆ぜて、中からスイッチが現れた。スイッチを手早く、押す。

すると、艦長の座る辺りの床がぱっくり開き戸のように裂け、彼は座席ごと下方へ滑り始めた。エレベーターのような器具に椅子は運ばれて、下へさがって行く。

「なっ」ミリティアの男は驚きに声をあげた。

艦長座席の下には、緊急脱出用の仕掛けがあったのだ。

あつという間に艦長は椅子ごと、床の中へ消えてしまった。そして、亀裂は何ごともしなかったかのように閉まる。

クルー一堂は、自分たちのリーダーのまさかの独り逃げに、目を白黒させた。

艦長の逃亡と、ほぼ同時に、ブリッジの後方の扉が破壊された。

無理やり火薬で破壊され、扉を構成していた金属片がブリッジ内部へ飛散した。

壊れた扉を蹴りぬいて、緑の軍服が押し合いへし合い、数名なだれ込む。

扉の壊れる音に、軍靴のしかつめらしい足音が混じる。

なだれ込んだミリティア兵たちは、散開し、扇形状に拡がる。

そして、機関銃を構え、一斉掃射した。

弾丸が銃口から次々と溢れ出る。その弾丸に貫かれて、クルーたちが蜂の巣になって行った。

弾丸に踊らされ、血の雨を降らせるクルーたち。ブリッジに怒号と悲鳴が立ち込め始める。

逃げようとするクルーも片っ端から排除された。

引き金に手を当てる兵士たちには、ためらいの感情も罪悪感も、全く見受けられなかった。

数十名のクルーを死体に変えてしまってから、ミリティア兵はブリッジの大型モニターへ目をやった。

「諸君。失敗だ。あの外道は逃げた」

ホログラムの画面越しに、彼らのトップ、ミリティアの総統である彼は、渋い面持ちで言った。

「……了解です。総統」

リーダー格らしい男が、敬礼をした。

総統と呼ばれた男も、敬礼を返す。

「指示を」野太い声。

「やつは恐らく、未提出の新造区画にいるだろう。調査は済んでいるな？」

「はい」

「他の部隊にも通達。最優先は、やつの探索。工兵たちには、模造能の奪取を支持しておけ」

「はい」

彼は即座に踵を返すと、数名の部下を残しブリッジから去った。

ミリティアの次の作戦は、艦長の搜索となった。

一応、騒乱とは関係なく第四ラボは安穩とした空気であちていた。理由は簡単だ。ミリティアの庇護の下にあるのだ。

「最初からの実験室には、何の映像もなかったよ」白衣の男が言った。

彼の部下は、眉をよせながら、駁す。

「沙漠が、あつたじゃないですか……」

「そんなものはなかったよ。砂漠とは比喻に過ぎなかったんだけど」
「しかしですね、報告書が……」

尚も部下は言いつのつた。

彼は沙漠を見たことはなかったが、模造能を調べている研究者の報告を読めば、そう書いてある。

「あの報告書は、誰に向かって書かれたか？ 解るかい？」
「え？」

部下は面食つて、すつとんきょうな声をあげた。

彼は報告書は司令部に対して、書かれたものだと思っていた。

「きみは勘違いしているんだよ。あの実験は、誰が対象で、誰が撰^{りて}手だったのかをね」

薄い唇を攣つて、白衣の男は言った。

「はあ？」

「見ておくといい。これからが面白いんだからなあ」

これからを楽しみにするように白衣の男は言った。

「これから、ですか？」

「そう。これから。正解を言おう。これはミリティアに向かってかかれたものなんだよ」

そう言つと、白衣の男は紙の束を出した。

「ミリティア、ですか？ しかし、新しいシステムを欲していたのは司令部なのではないですか？」

「だから、おまえは青いのだよ」

「はあ……」

「彼女が書いた報告書は我らが預かっている、意味解るか？」

「つまり？」

「彼女の報告書は、報告書ではない、ということ」

「ますます、意味が解らないですが？」

「まあ、これを読め」

部下にさきほどの紙束を渡す。

彼は紙束に目を落とした。

「著者チャールズ・バベッジ……？」

「続き、読め」

「実験補助、模造能 K R I T O B T R I N X……。博士、これは
どういうことでしょうか？」

「そのままの意味だよ」

「……」部下は押し黙った。

しばらく彼は紙面を凝視していた。

そして、ふと顔を上げる。

「は 博士い？」

「ん？ どうした？」

部下が怯えた顔をしているのを見て、博士は後ろを振り返り。彼の視線を追った。

豹がいた。黒い毛に、しなやかな背筋、細くたくましい四肢のジャガー。

ジャガーは、口をあけ、牙をむいた。そして、吠えた。

二人とも硬直した。

あうあうと、口と唇と舌を震わせることしかできなかった。

ジャガーが飛んだ。百メートル以上離れた距離を一気につめた。

ジャガーは問答無用で、彼らに食らいつき、その四肢を裁断し、その骨を刃のような歯で粉碎し、からどき勝鬨をあげた。

ばらばらになった肉片が飛んだ。

ジャガーの咆哮は続いた。

艦長は、勝手に設えた避難場所で一息ついた。

椅子にかけたまま、伸びを一つ。

さきほどは居丈高に振舞っていたものの、実際はかなりの緊張状態にあったので、胸を押さえて、動悸を鎮めんとする。

「全くどうしたものか……」

ブリッジは、ミリティア兵によって、占拠されたと見て間違いは

ないだろう。

ラベルBは果たして、アンチボディに倒されだろうか？
彼らの口振りから察するに、ラベルAの正体を彼らも知らないようだ。だから、ラベルBさえ駆逐されれば、この場所がバレる心配はない。

十余年前はミリティアを出し抜いた彼だったが、今回は彼らの勢いを殺せそうもない。

「むう……」

どうしたものだろうか？

部屋の小さなコンピュータを電源も点けずに小突く。

所在なげに、足を擦り合わせる。

彼は考えた。

「そうか……」

しばらく、思考をめぐらしていると。彼の頭に、妙案が浮かんできた。助かるうとするからいけないのだ。

自分はもう年だ。七十年生きた。

未練がないといえば、嘘だが、やりたいことはやった。今更、死んでも構わない。

ようは、醜く死なねばよいだけの話。

まず、憎らしい相手は絶対に、殺す。そして、自分の命など気に留めず、道連れにしてしまえばいいのだ。簡単な話ではないか。

なにせ、自分は半世紀以上も生き、したようにして生きた。今更、未練はないし、あるのは、かつての部下への怨嗟だけだ。

この部屋には、本来ブリッジでしか操作できないシステムを自由にできる。

艦長の絶対権限は失われてはいない。少し、細工して市民を謀つたに過ぎない。ミリティアの連中すら、最近まで気付きはしなかった。

「ばかに謀れるとはな……」

彼は壁に備えたパネルを捜査した。権限を全て、この部屋に回す。

ちよつとそのリミッターを外せばいい。

「見てろよ……」

パネルを操作し終えてから、艦長はコンピュータをブートアップした。

たった一つのアイデアを行う為だけに。

傲慢な男がいた。

「俺はこの山を覆す」と豪語していた男も、結局は滅ぼされた。カクルハーⅡフラカン、チピⅡカクルハー、ラハⅡカクルハーは言った。

「も滅ぼさなくてはいけない。これは我らの意思だ。彼がこの地でやっていることはよくないことである。栄光も偉大さも、更に言えば、自らの力を自慢していることも許されるべきではない。彼を騙せ、上手く謀り、太陽の出る彼方に彼をおびき出せ」

二人の若者が答えた。

「解りました。確かに、彼は正しくありません。天の心、平和の神のあたながいるというにも関わらず」

一方、彼の者カブラカンは、山を揺るがすのに懸命であった。

彼の一踏みで、小さな山は消えた。

そこへ、二人の若者が現れた。「若い人、何処へ行くのです？」

「何処へもいかん。俺は山を動かしている。天に太陽があり、光あるかぎり、いつまでも俺は山を動かす」

と答え、二人の若者、フンアフプーとイシュバランケーに更にたたみかけた。

「何しにきた？ きさまらの顔なんぞ、見たこともない。名前は何体、何と言うのだ？ 教えるがいい」

「私らには名はありません。ただ、山を歩き、猟をしている身の上です。自分のものすらない貧乏人であります。

小さな山を、大きな山を、歩き回っているに過ぎません。あの空が赤くなり、その彼方に大山を見ました。それはそれは、高い山で

した。

しかしながら、鳥を獲ろうとしたところ、一二羽程度しか獲れず、それで、あなたが山を覆うことができる聞き、どうにかならぬものかと思ったのです。本当の話なのでしょうが？」

カブラカンに訊ねた。

「その山の話は本当か？ 一体、何処にある。俺が潰して進ぜよう」「あちらに。太陽の昇る、あちらに」

「道を教える」

「それはなりません。あなたを中央にして、私たちがあなたの左右を歩きます。といいますのは、私たちは吹き矢を持っていますので、鳥が出たならこれで仕留めるのです」

と答えた。

そして、三人は愉快に歩き出した。

二人は確かに、吹き矢を持っていたが、矢が装填されてはいなかった。

けれども、矢なしに彼らは鳥を撃ち落した。

道中、その仕留めた鳥を丸焼きにして、カブラカンに振舞った。

ただし、鳥には焼く前に毒の土を塗りこめた。

「一切れ、くれ」

とカブラカンは言った。

鳥を食した後、再び歩き始めた。

山に至ったが、その頃には、カブラカンは土の所為で力を失くしてしまっていた。

山を覆すなど、できようもなく、それを見た二人は彼を縛り上げた。手と背中を結びつけて、土中に放り込んだ。

こうして、カブラカンは滅ぼされた。

二人の偉業はこれだけではないが、今回はこのことのみ記そう。

四章（後書き）

現在、未完了です。今後の展開は一応構想はありますが、書き溜めておりません。

更新は未定です。

そもそも、この章が未完了です。修正予定なし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6722f/>

サバク脳、沙漠脳、裁く脳

2011年1月8日15時24分発行